

高城町文化財調査報告書 第20集

牧ノ原遺跡群

個人農地造成・道路拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

高城町教育委員会



牧ノ原遺跡群(西から)



平成16年度（2004）調査・1号箱式石棺墓

序

本報告書は開発事業に先立ち実施された埋蔵文化財発掘調査の記録です。

平成15年、16年度の調査により箱式石棺墓3基、地下式横穴墓15基の出土など大きな成果が上がりました。この報告書が行政の一資料としてだけでなく、生涯学習の場などで広く活用され、地域への関心を深める手助けとなれば幸いです。最後になりましたが、多大なるご協力を賜りました各関係機関並びに町民の皆様方に心から深く感謝を申し上げます。

平成17年3月

高城町教育委員会

教育長 内田國昭

例 言

1 本書は平成15年度、平成16年度に高城町教育委員会が実施した、宮崎県北諸県郡高城町大字大井手・立喰に所在する牧ノ原遺跡群の発掘調査報告書である。

2 本発掘調査の起因・期間は次のとおりである。

平成15年度（2003）調査：個人農地造成：平成15年10月1日～12月31日

平成16年度（2004）調査：町道並幅：平成16年12月15日～12月27日

発掘調査から報告書作成にかけての一切の業務は事業者より高城町教育委員会が委託を受け、宮崎県教育委員会の指導のもとに実施した。また平成15年度調査あたっては文化庁及び宮崎県教育委員会の補助を受けている。

3 本発掘調査の主作者及び担当者は次のとおりである。

主作者 高城町教育委員会

担当者 近沢恒典（高城町教育委員会社会教育課主事）

4 本発掘調査における遺構実測図の作成は発掘調査作業員の協力の下に近沢恒典が中心となって行った。平成16年度調査では1号箱式石棺墓、全体測量を有限会社ジバングサーバイに委託した。また平成16年度1号地下式横穴墓実測図作成にあたっては秋成雅博氏（清武町教育委員会）の協力を得た。遺構等の写真撮影は近沢恒典が行い、平成15年度調査で実施した航空写真撮影は九州航空株式会社に委託した。出土人骨の実測・取上げ・鑑定は竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）に依頼した。

5 本報告のための整理作業は平成16年度に実施した。遺構の製図は近沢恒典、尾曲真貴が行った。古墳時代遺物の実測は橋本達也、藤井大祐両氏、製図、鉄製品・玉類観察表は藤井大祐氏に作製を頂いた。古墳時代遺物の写真については橋本達也氏に頂いた。その他の遺物実測、製図は近沢恒典、尾曲真貴が行った。その他の遺物写真撮影は近沢恒典が行った。

6 本報告の執筆及び編集は近沢恒典が中心となって実施し、竹中正巳氏、橋本達也氏、藤井大祐氏より玉藻を賜った。執筆の箇所については各文に記載している。なお、本書に掲載した遺構写真の一部は橋本達也氏、有限会社ジバングサーバイより頂いたものを使用している。

7 平成15年度刊行の概要報告書「町内遺跡発掘調査報告書IV」（高城町教育委員会2004）において「1号溝状構」としていた遺構名を「2号溝状構」と改称する。

8 調査及び報告書作成にあたっては平成15年度調査区の土地所有者である四元福男氏の御協力を得たほか、次の諸氏・諸機関の御指導・御支援を得た。御芳名を記して感謝申し上げます。（順不同）

矢部善夫氏（都城市教育委員会）・栗原博氏（都城市教育委員会）・久松光氏（都城市教育委員会）・秋成雅博氏（清武町教育委員会）

竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）・橋本達也氏（鹿児島大学総合博物館）・藤井大祐氏（鹿児島大学大学院生）

大西智和氏（鹿児島国際大学）

高城町建設課・宮崎県教育委員会・宮崎県埋蔵文化財センター・都城市教育委員会文化課

9 記録帳や出土遺物は高城町教育委員会において保管している。

本文目次

1 発掘調査に至る経緯	1	図16 4号地下式横穴墓出土遺物実測図	12
2 調査の組織	1	図17 5号地下式横穴墓実測図	13
3 調査の方法及び経過	1	図18 6～8号地下式横穴墓実測図	14
4 遺跡の立地と環境	3	図19 9号地下式横穴墓実測図	15
5 平成15年度(2003)調査	5	図20 9号地下式横穴墓出土遺物実測図	15
I 序章	5	図21 10号地下式横穴墓出土遺物実測図	16
II 古墳時代の遺構・遺物	5	図22 10号地下式横穴墓出土遺物実測図	16
1 号箱式石棺墓	5	図23 11～12号地下式横穴墓実測図	17
2 号箱式石棺墓	8	図24 1号溝状造構実測図	17
1号地下式横穴墓	8	図25 1～6号柱立柱建物跡実測図	19
2号地下式横穴墓	9	図26 1号土壙墓出土遺物実測図	19
3号地下式横穴墓	10	図27 2・3号土壙墓出土遺物実測図	20
4号地下式横穴墓	11	図28 中世遺物分布図	22
5号地下式横穴墓	11	図29 1～6号柱立柱建物跡実測図	23
6号地下式横穴墓	12	図30 7～15号柱立柱建物跡実測図	24
7号地下式横穴墓	13	図31 1号配石造構・3～7号土壙墓実測図	25
8号地下式横穴墓	13	図32 2号溝状造構実測図	25
9号地下式横穴墓	13	図33 中世遺物実測図	26
10号地下式横穴墓	15	●平成16年度(2004)調査	
11号地下式横穴墓	15	図34 平成16年度調査区・遺構分布図	30
12号地下式横穴墓	16	図35 土層図	30
1号溝状造構	18	図36 1号箱式石棺墓実測図	31
1号土壙墓	18	図37 1号箱式石棺墓出土遺物実測図	32
2号土壙墓	18	図38 1号木棺直葬墓実測図	34
3号土壙墓	18	図39 1号木棺直葬墓出土遺物実測図	35
IV 中世の遺構・遺物	21	図40 1号地下式横穴墓実測図	36
柱立柱建物跡群	21	図41 1号地下式横穴墓出土遺物実測図	36
1号配石造構	21	図42 2号地下式横穴墓実測図	37
4号土壙	21	図43 3号地下式横穴墓実測図	37
5号土壙	21	図44 1号溝状造構実測図	38
6号土壙	21		
7号土壙	21		
2号溝状造構	22		
包含層出土遺物	22		
6 平成16年度(2004)調査	29		
I 序章	29		
II 古墳時代の遺構・遺物	29		
1号箱式石棺墓	29	●平成15年度(2003)調査	
1号木棺直葬墓	33	表1 箱式石棺墓計測値一覧	27
1号地下式横穴墓	36	表2 地下式横穴墓計測値一覧	27
2号地下式横穴墓	37	表3 土壙計測値一覧	27
3号地下式横穴墓	38	表4 柱立柱建物跡計測値一覧	27
III その他の遺構	38	表5 溝状造構計測値一覧	27
1号溝状造構	38	表6 配石造構計測値一覧	27
まとめ	40	表7 鉄劍計測値一覧	27
付編1 牧ノ原遺跡群出土鉄製品の意義	42	表8 刀子計測値一覧	27
付編2 牧ノ原遺跡群出土の古墳時代人骨	44	表9 鉄鍔計測値一覧	28
報告書抄録	52	表10 人類骨頭値一覧	28
		表11 陶磁器計測値一覧	28
		表12 土師器計測値一覧	28
		●平成16年度(2004)調査	
		表13 箱式石棺墓計測値一覧	38
		表14 木棺直葬墓計測値一覧	38
		表15 地下式横穴墓計測値一覧	38
		表16 溝状造構計測値一覧	38
		表17 鉄劍計測値一覧	39
		表18 刀子・ノミ状工具計測値一覧	39
		表19 鉄鍔計測値一覧	39

挿図目次

図1 遺跡位置図	2
図2 調査区位置図	3
●平成15年度(2003)調査	
図3 平成15年度調査区・遺構分布図	4
図4 古墳時代遺構分布図	5
図5 土層図	5
図6 1号新式石棺墓実測図	6
図7 1号箱式石棺墓出土遺物実測図	7
図8 2号箱式石棺墓実測図	8
図9 2号箱式石棺墓出土遺物実測図	8
図10 1号地下式横穴墓実測図	9
図11 1号地下式横穴墓出土遺物実測図	9
図12 2号地下式横穴墓実測図	10
図13 2号地下式横穴墓出土遺物実測図	10
図14 3号地下式横穴墓実測図	11
図15 4号地下式横穴墓実測図	12

図版目次

卷頭図版	牧ノ原遺跡群(西から)：平成16年度(2004)調査・1号箱式石棺墓
図版1	平成15年度(2003)調査・遺構①
図版2	平成15年度(2003)調査・遺構②
図版3	平成15年度(2003)調査・遺物①
図版4	平成15年度(2003)調査・遺物②
図版5	平成16年度(2004)調査・遺構①
図版6	平成16年度(2004)調査・遺構③
図版7	平成16年度(2004)調査・遺物

1 発掘調査に至る経緯

平成15年度(2003)調査 煙の造成中に石棺が出土したとの連絡が高城町教育委員会にあった。町教育委員会が現状を確認したところ箱式石棺と確認されたため、事業者に工事中断を申し入れ、宮崎県教育庁文化課へと連絡、取扱について協議を行った。その後土地所有者との協議を重ね、削平される部分について記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。

平成16年度(2004)調査 高城町建設課より須田木・軍人原線町道拡幅工事予定地内における埋蔵文化財について高城町教育委員会へ照会があった。平成16年12月14日、町教育委員会が試掘調査を実施した結果、地下式横穴墓竪坑部1基等が検出されたため、町建設課、町教育委員会との間で協議を行い、削平される部分について記録保存を目的とする発掘調査を実施することとなった。
(近沢)

2 調査の組織

牧ノ原遺跡群発掘調査の調査組織は以下のとおりである。

(近沢)

平成15年度(調査)

主 体 高城町教育委員会
教育長 内田國昭
社会教育課長 江内谷尚義
同課長補佐 新地安弘
同文化係長 永峯キヌ子
同主査 小河原隆文(庶務)
同主事 近沢恒典(調査)
調査作業員 岩永スズ子 大浦フミ 齋田エミ子
倉重選男 黒木征子 黒木トミ子
庄屋幸子 馬鹿恵子 増元鉄子
袖木崎時男
指導・支援 宮崎県教育庁文化課主査 飯田博之
都城市教育委員会文化課主査 矢部喜多夫
都城市教育委員会文化課主査 末烟光博
都城市教育委員会文化課主査 久松亮
鹿児島女子短期大学助教授 竹中正巳
鹿児島大学総合博物館助教授 橋本達也

平成16年度(調査・整理・報告書作成)

主 体 高城町教育委員会
教育長 内田國昭
社会教育課長 江内谷尚義
同課長補佐 新地安弘
同文化係長 永峯キヌ子
同主査 小河原隆文(庶務)
同主事 近沢恒典(調査・整理・報告書)
調査作業員 大浦フミ 齋田エミ子 黒木征子
黒木トミ子 増元鉄子
整理作業員 尾曲真貴
指導・支援 宮崎県教育庁文化課主査 飯田博之
清武町教育委員会社会教育課主事 秋成雅博
鹿児島女子短期大学助教授 竹中正巳
鹿児島大学総合博物館助教授 橋本達也
鹿児島大学大学院生 藤井大祐

3 調査の方法及び経過

平成15年度(2003)調査 調査面積は2,800m²である。平成15年10月1日、重機による表土の除去を開始した。調査員と作業員により包含層の掘り下げ、遺構・遺物の検出を行い、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が確認された。古墳時代の遺構として箱式石棺墓2基、土壙墓3基、地下式横穴墓12基、中世の遺構としては掘立柱建物跡15棟、土壙4基、溝状遺構1条等が出土している。写真撮影、実測等記録作業を実施した後、平成15年12月31日をもって全ての現場作業を終了した。

平成16年度(2004)調査 調査面積は680m²である。平成16年12月15日、重機による表土の除去を開始した。調査員と作業員により包含層の掘り下げ、遺構・遺物の検出を行い、古墳時代を中心とした遺構・遺物が出土した。古墳時代の遺構として箱式石棺墓1基、木棺直葬墓1基、地下式横穴墓3基、時期の特定のできなかった遺構として溝状遺構1条、ピット多数が検出された。その後、写真撮影、実測等記録作業を行い、平成16年12月27日をもって全ての作業を終了した。
(近沢)

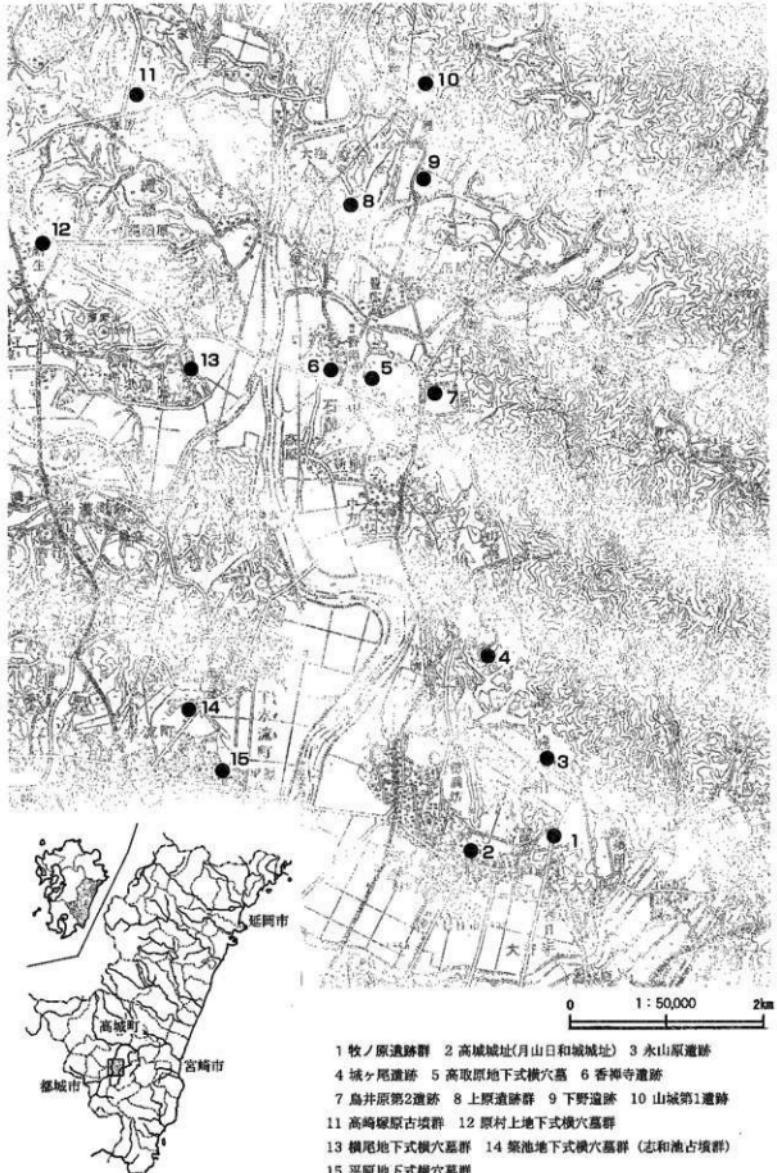


図1 遺跡位置図

4. 遺跡の立地と環境

牧ノ原遺跡群は宮崎県北諸県郡高城町大字大井手字牧ノ原・立喰に所在する。

宮崎県の南西部に位置する都城盆地は霧島火山群と鶴峯山地との間に形成され、宮崎平野と鹿児島湾や大隅半島とのほぼ中間にあたる。南北に細長い盆地内を大淀川が北へと貢流し、中央の低地を取囲むようにシラス台地・成層シラス台地が発達している。高城町はその北縁に位置し、南北24km、東西4~8km、総面積9,421haと細長い町域を形成する。町北部は宮崎平野と都城盆地とを隔てる標高200~300mの山地帯、中南部から南部にかけてはシラス台地が展開し、南端部は盆地内へと続く沖積平野となる。

牧ノ原遺跡群は町南部に位置し、南に盆地を展望するシラス台地上に立地する。本台地は東を鶴峯山地より北西に延びる山地に接し、西・南を大淀川とその支流東岳川に囲まれ、東西約2km、南北約2km、標高160~180m、山地と接する東側に最高点をもち西へ向け序々に高度を下げる。台地下の沖積平野との比高差は約15mである。中央の谷により東西に大きく二分され、牧ノ原遺跡群は東側台地の南部をその範囲とする。台地北側には昭和60年に発掘調査が実施され古代~中世の掘立柱建物跡、溝状遺構等が検出された水山原遺跡が所在している。また西側台地の南端には中世城郭である高城城址が形成されている。

本遺跡群内には宮崎県指定史跡高城町古墳群13基（前方後円墳3基・円墳10基）未指定円墳1基が展開し、古墳自体の調査はなされていないものの、過去のは場整備等に伴い3度の発掘調査が実施されている。昭和42年の調査では10号墳の南約10m、約30mの地点より2基の箱式石棺が検出され、その内の1基からは人骨、鉄劍1点、鐵鏃3点、堅御1点が出土している。昭和43年の調査では13号墳の墳端部にて箱式石棺が確認され、13号墳と北側道路との間より地下式横穴墓1基、土壙1基が検出されている。地下式横穴墓からは鉄劍1点、鐵鏃1点、土壙からは鐵鏃1点が出土している。昭和51年の調査では8・9号墳から約20mの地点にて箱式石棺1基が検出され、直刀1点、鉄劍1点、鐵鏃1点が出土している。

周辺の遺跡としては、北へ5~6kmの有水川周辺において、古墳時代中期前半にあたる高取原地下式横穴墓、地下式板石積石室・地下式横穴墓が検出された香寺遺跡、古墳時代中期の住居址群が確認された上原遺跡群、山城第1遺跡が所在する。これら町内の遺跡と共に大淀川対岸にて志和池古墳群（都城市）、築池地下式横穴墓群（都城市）、平原地下式横穴墓群（都城市）、やや北上し高崎塚原古墳群（高崎町）、原村上地下式横穴墓群（高崎町）、横尾地下式横穴墓群（高崎町）が形成されており、当地域は盆地内における古墳群の集中する一帯となっている。

(近沢)



図2 調査区位置図

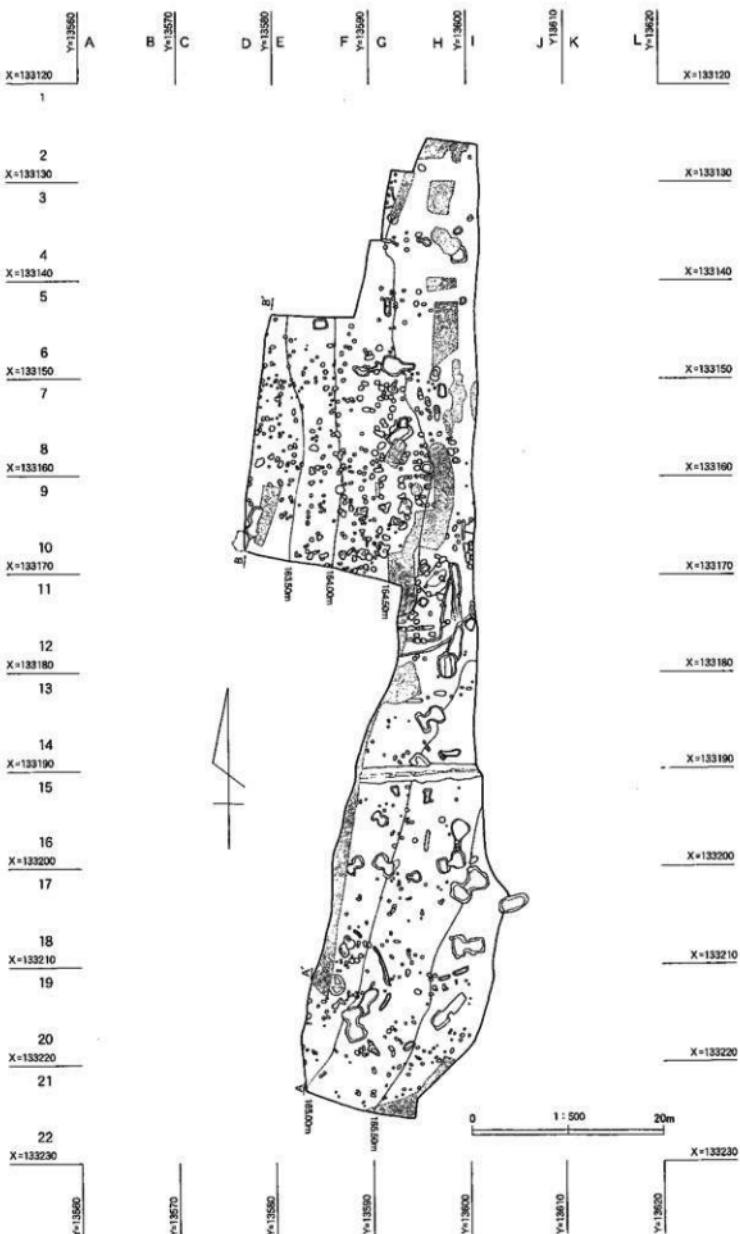


図3 平成15年度調査区・遺構分布図

5 平成15年度(2003)調査

I 層序 (図5)

本調査区は牧ノ原遺跡群の西端部、台地縁辺に位置しており、調査区中央部から西へと向かい傾斜をもつ。調査区の東に隣接し12・13号墳があり、13号墳の北側では昭和51年に土壌1基、地下式横穴墓1基の調査が実施されている。また谷を挟んだ西側台地には高城城址が形成されている。基本層序は次のとおりである。

1層・表土

- 2層・黒褐色土（固い。霧島御池軽石を多く含む。）
- 3層・黒褐色土（固い。しまり強。霧島御池軽石をごく微量含む。）
- 4層・黒褐色土（固い。しまり強。霧島御池軽石を少量含む。）
- 5層・黒褐色土（霧島御池軽石を3層より多く含む。）
- 6層・霧島御池軽石層（層厚約1m。）

昭和40・50年代に実施されたは場整備により搅乱や削平を受けている部分が多く、調査区北側では表土直下が上部を削平された6層となる状況であった。また南側では4・5層の堆積が薄く、3層直下が6層となる部分もあり、大きく傾斜する西側では1層が約1mと厚く、は場整備に関係する盛土かと考えられた。遺構検出は6層上面で行った。調査前は畠地として利用されていた。
(近沢)

II 古墳時代の遺構・遺物

1号箱式石棺墓 (図6・7)

遺構 調査区南側I-17グリッドにて検出された。上部・東側一部が搅乱により破壊されている。石棺墓の主軸は東-西である。

墓壙の検出面での平面形は長さ2.97m、幅1.50mの不整橿円形を呈し東側がやや狭くなる。検出面からの深さは0.54mで、床面は狭く石棺設置後は西側部分にしか平坦面は残らない。壁面は外傾しながら緩やかに立ち上がる。埋土は霧島御池軽石に少量の黒色土が含まれる層が主体となり、軽石を含む割合により分級された。いずれもしまりは弱い。また堆積状況より墓石上半部にあたる9層上面にて一度平坦面を形成している状況がうかがえた。

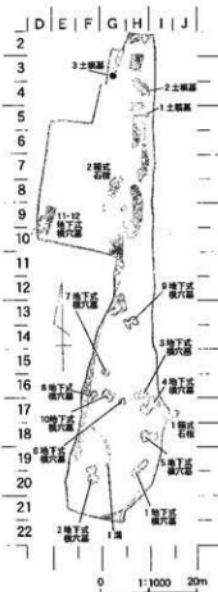


図4 古墳時代遺構分布図

■ 搅乱

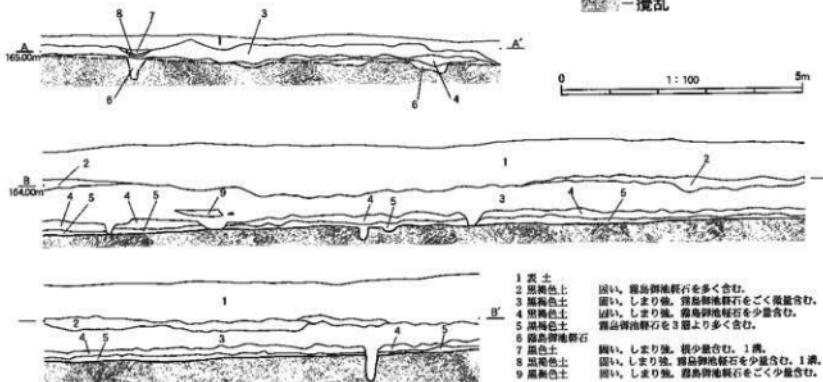


図5 土層図

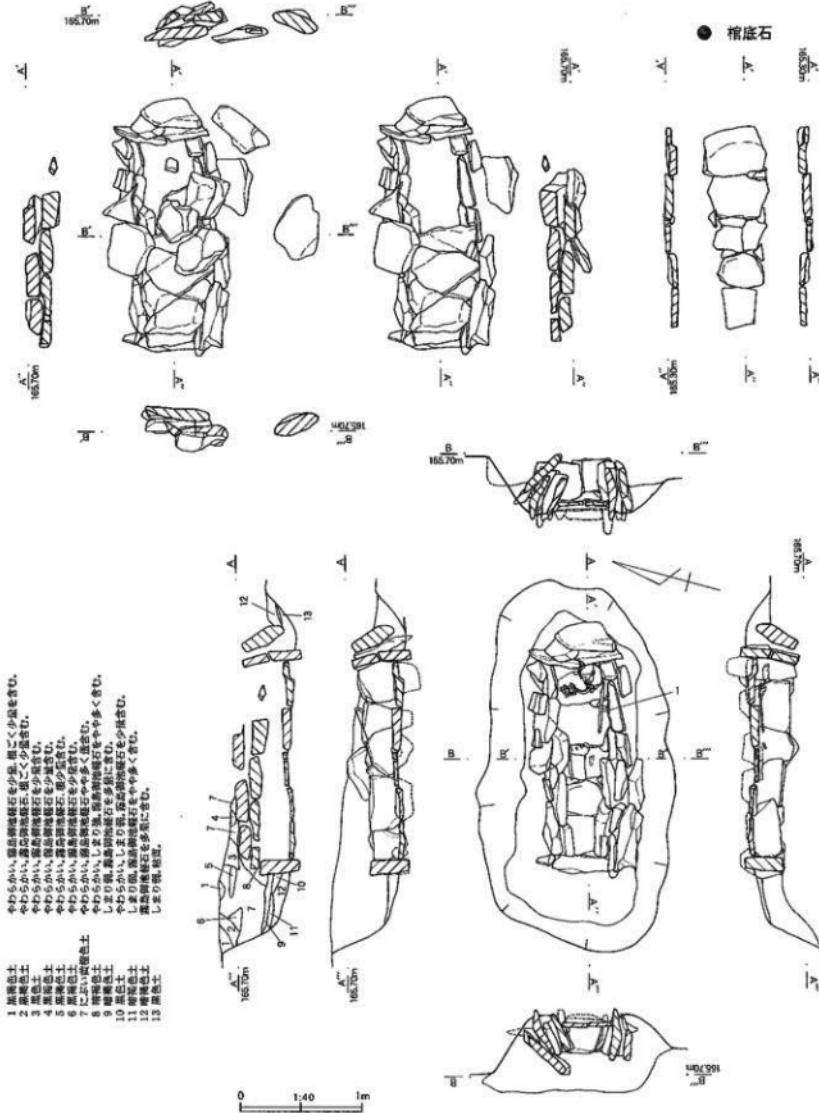


図6 1号箱式石棺基実測図

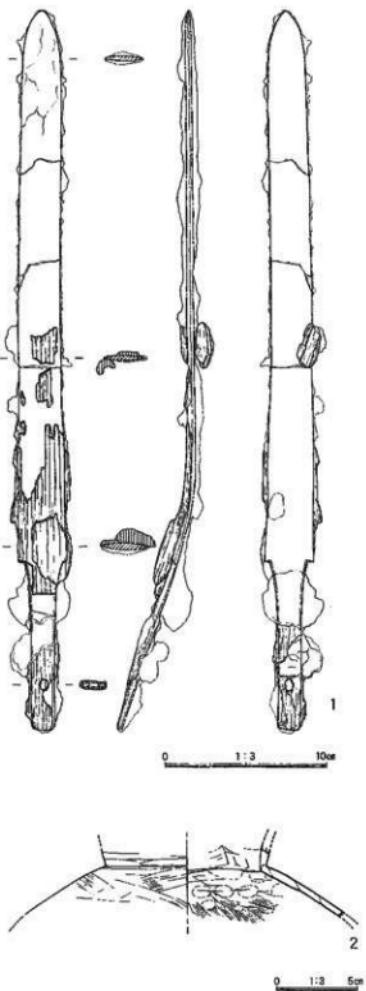


図7 1号箱式石棺墓出土遺物実測図

見られた。また埋土中より土器片2点が出土している。

(近沢)

遺物 1・鐵劍 残存状況は比較的良好である。全長447cmを測り、剣身は切先からやや幅を広げつつ刃部間に至る。剣身に鎬はみられず、両丸造りである。刃部闊は直角闊で、関付近の身幅は3cmである。茎には目釘孔が一箇所存在する。茎は幅を減じながら茎尻に至り、茎尻は構造の一文字尻となる。把および鞘を構成していた木質が部分的に確認できる。また、剣身の中ほどには矢柄の一部とみられる木質が付着するが、鉄劍自体は出土していない。

石棺は墓壙の東よりに構築される。内法は長さ1.63m、幅0.52~0.25mの羽子板状を呈する。搅乱により移動したもの、破砕されているものを含め計51枚の板石が確認され、石材は調査時の目視による確認では砂岩と考えられた。棺床以外は厚さ20cm程度のやや厚みのある板石を使用する。

蓋石で原位置を保っていたものは西側の3枚であった。構築時は5~6枚を架設していたものと考えられた。各蓋石の縦ぎ目上には板石が配置される。東側から中央にかけては搅乱により移動していたが、西側の2枚は良好に残っていた。構築時は4~5枚を整列させていたと考えられる。蓋石の縦ぎ目、蓋石と上部板石との隙間に粘土が充填され、蓋石を被覆するようににびい黄褐色土層(8層)が確認された。

小口石は南側共に各1枚で構成される。東小口の外側には板石2枚の設置が見られる。だが最も外側の石は横長基調であり、墓壙底面にまで達しておらず、搅乱により落下した蓋石の可能性がある。小口石と長側石との組み方は小口石が長側石の外側に位置する。長側石は片側5枚、計10枚で構成される。土圧によるものか内側に倒れ気味のものが多い。各石の縦ぎ方は重ね縦ぎで、西小口から東小口へ外側から重ねていく。また東小口から2枚目の長側石は前述する外側板石の外側に重ねられている。

長側石の外側には二重にわたる板石の配置が確認された。南長側石のすぐ外側に配置された第一の板石は、東小口から長側石1、2枚目では縦ぎ目の外側にのみ継長基調の板石を用いるのに対し、長側石3枚目以降では全体を覆うように設置している。また南長側石西端に設置された外側板石は西小口外まで至る。第二の板石は第一板石の外側にやや大型の板石を、搅乱による移動が大きいが南長側では中央から西側にかけて3枚、北長側では中央部に2枚を配置している。

長側石と外側板石との隙間に粘土の充填が見られ、小口石、長側石、外側板石共に10~30cm程度霧島御池輕石層に突き刺さるように設置されていた。

棺床には扁平な板石5枚を霧島御池輕石層直上に設置していた。東小口から西小口に向かい幅を狭める。中央部が高くなり両小口に向かい若干低くなる。

棺内より人骨1体、鉄劍1点、赤色顔料の塗布が確認された。人骨は東頭位で頭骸骨は棺内への土砂の流入によるものが圧迫された状態であった。なお、人骨については壮年女性との所見が出ている。鉄劍は頭骸骨の南脇より切先を東に向け出土した。赤色顔料は東部を中心に検出され、東小口石、長側石壁面にも塗布が

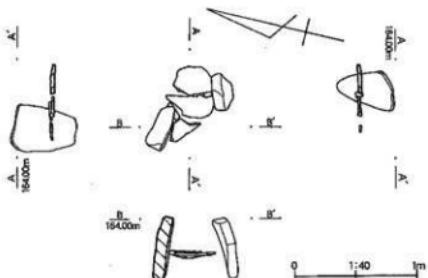


図8 2号箱式石棺墓実測図

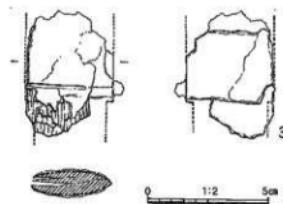


図9 2号箱式石棺墓出土遺物実測図

2・土器部蓋 頸部片である。外側は不定方向のナデが施される。内面は頸部が5mm幅の工具によるヨコナデのちナデ、肩部にかけて指オサエや不定方向のナデが施される。また、内外面とも頸部に0.2mm以下の細かい点が列状に確認できる。

(藤井)

2号箱式石棺蓋（図8・9）

遺構 調査区北側G-7グリッドにて検出された。墓壙、石棺共に大きく破壊され、両小口石は消失し長側石の一部と床面の底石の一部のみの残存であった。その主軸は東-西である。長側石は片側1枚、計2枚、底石は3枚が残る。長側石は厚さ15cm程度、長さ40cm程度の縦長基調の石を使用し、底石には薄い板石を用いる。石材は調査時の目視による確認では砂岩と考えられた。石棺の西側より鉄剣の破片1点が出土している。

(近沢)

遺物 3・鉄剣 剣身下端から関、茎上半にかけての破片で、現存長5cm、幅3.3cmを測る。

(藤井)

1号地下式横穴墓（図11・12）

遺構 調査区南側H-19・20グリッドで検出された。玄室から羨道にかけて大きく崩落していた。

地下式横穴墓の主軸は北東である。竪坑平面形は長さ1.75m、幅1.52mの長方形を呈するが、南西側のコーナーは丸みを帯びる。検出面からの深さは0.86m、床面は羨門に向かい若干下がり、壁面は外傾しながら立ち上がる。埋土は羨門側の黒色土層、逆側の糞島御池輕石を主体とする層とに大別された。羨門は竪坑東壁北より構築され、羨道は羨門よりほぼ同一幅を保ちながら玄室へと至る。玄室は奥行2.13m、幅1.05mの妻入り右片袖長方形の平面形を呈するが、奥壁の幅が0.55mと狭く先頭り状となる。または右袖はやや外へと膨らみつつ奥壁へと至る。壁面は奥壁では外傾、南側壁では内傾しながら立ち上がり、約45cmの高さで内傾へと折れる。羨門～羨道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。玄室右袖南側の床面より鉄剣1点、ほぼ中央より刀子1点が出土している。

(近沢)

遺物 4・鉄剣 残存状況は良好である。全長27cmを測り、剣身は切先から幅を広げつつ刃部間に至る。剣身に鏽はない、両丸造りである。関はナデ関で、関付近の身幅は3.1cmである。茎には目釘孔が二箇所存在し、茎尻側には目釘も確認できる。茎はゆるやかにカーブを描きつつ幅を減じて茎尻に至り、茎尻は栗尻となる。把は劣化が進行しているが、把木の上には部分的に糸巻きの痕跡が観察できる。把握部は落とし込みで、把木は目釘と糸巻きにより固定されたと思われる。剣身には木質が付着せず、抜き身での副葬が想定されるが、関から把上端の一部に布の痕跡が確認できることから、布が巻かれていた可能性もある。

5・刀子 残存状況は比較的の良い好で、銹化も進行していない。全長9.9cmを測り、刃部は切先からふくらを有し刃部半ばまで直線的であるが、その後は幅を広げつつ刃部間に至る。関は直角関で、関付近の身幅は1.7cmである。茎は茎元から幅を同じくして茎尻に至り、茎尻は隅丸・一字形となる。刃部の一部で布の痕跡が観察できるが、糸の太さ、織幅などは不明である。柄は鹿角製であるが劣化が進行している。

(藤井)

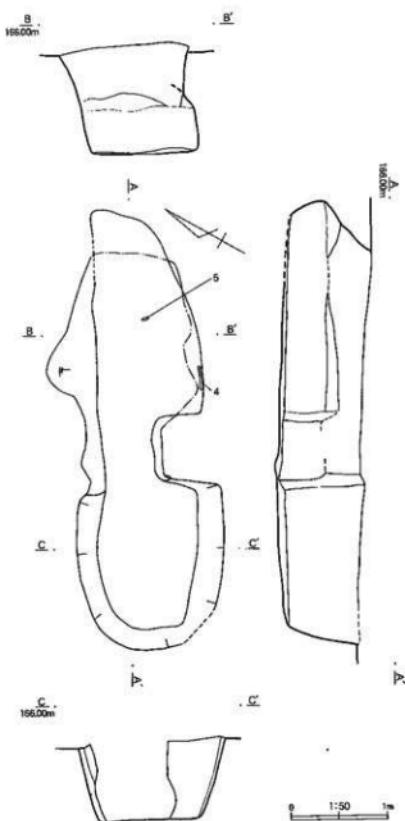


図10 1号地下式横穴墓実測図

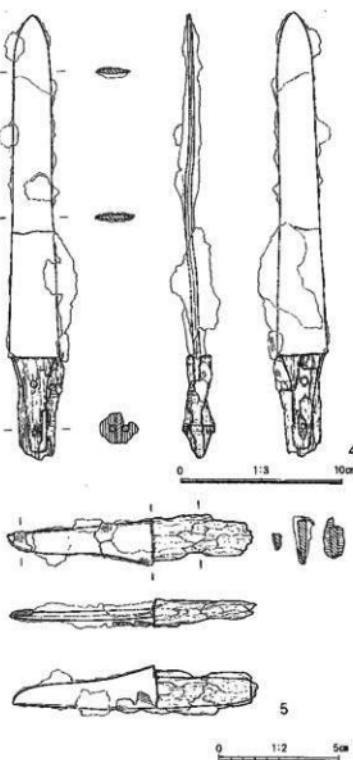


図11 1号地下式横穴墓出土遺物実測図

2号地下式横穴墓（図12・13）

遺構 調査区南側F-19・20グリッドで検出された。玄室から羨道にかけて崩落していた。1～6層は玄室・羨道崩落に伴う流入土、7～19層が豊坑埋土および羨門からの流入土である。堆積状況の観察から羨門より豊坑埋土が玄室内に流入した後、玄室・羨道天井が崩落したと推測された。

地下式横穴墓の主軸は北である。豊坑平面形は長さ1.83m、幅1.99mの隅丸方形である。検出面からの深さは1.10m、床面は平坦で、壁面は若干外傾しながら立ち上がる。埋土は霧島御池軽石にごく少量の黒色土を含む層が主体となる。羨門は豊坑北壁のはば中央に構築される。土層堆積に閉塞施設の痕跡が認められない点より、木材を使用した板閉塞と考えられた。羨道は中央付近にて最小幅を測り、その幅を広げつつ玄室へと至る。また床面は羨門付近が最も低く、羨道を抜け玄室奥壁に向けて徐々に高くなる。玄室平面形は奥行1.1m、幅1.9mの平入り両袖隅丸長方形を呈する。壁面はやや外傾しながら立ち上がる。羨門～羨道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。床面中央部にて人骨の残存と考えられるペースト状の有機質、赤色顔料の塗布が確認され、刀子1点が出土している。
(近沢)

遺物 6・刀子 残存状況は比較的良好であるが、切先部が欠損する。現存長は8.7cmで、切先部は不明ながら緩やかに

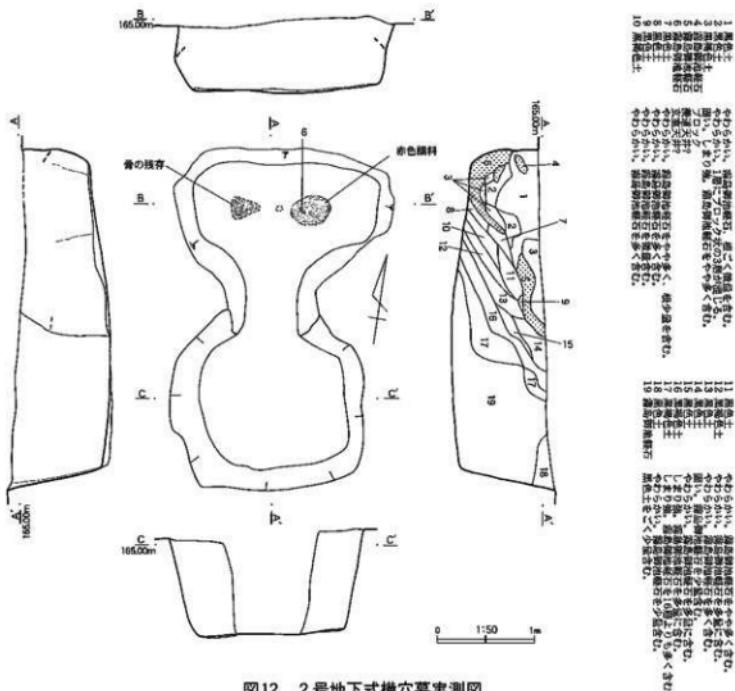


図12 2号地下式横穴墓実測図

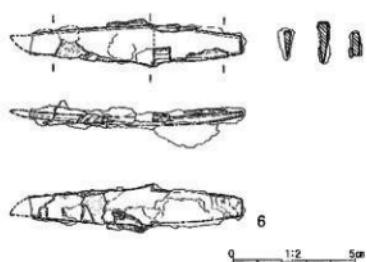


図13 2号地下式横穴墓出土遺物実測図

幅を広げつつ刃部間に至る。刃部間は両開で、刃・背側とともに直角関である。茎は茎元から若干幅を狭めながら茎尻に至り、茎尻は球丸・一文字尻となる。刃部には布の痕跡が認められるが、銹に覆われ太さや単位などは不明である。茎には柄木の痕跡が認められる。

(藤井)

3号地下式横穴墓 (図14)

遺構 濃査区南側H-16グリッドで検出された。4号地下式横穴墓に隣接する。玄室から羨道にかけて大きく崩落していた。

地下式横穴墓の主軸は東である。堅坑平面形は長さ1.18m、幅1.55mの圓丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.84m、床面は平坦で、壁面はほぼ直立する。埋土は霧島御池輕石を主体とする層であった。羨門は堅坑東壁のほぼ中央、床面よりも10cm程度高い位置に構築される。羨道は0.65mの右側壁に対し、左側壁は0.4mと短い。また壁面より赤色顔料が確認された。床面は玄室に向かい若干高くなる。玄室平面形は奥行0.95~1.18m、幅1.62mの平入り両袖長方形である。床面は中央部がやや低く、奥壁に向かって高くなる。壁面は直立もしくは外傾しながら立ち上がり、約35cmの高さで内側へと折れる。羨門～羨道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。

(近沢)

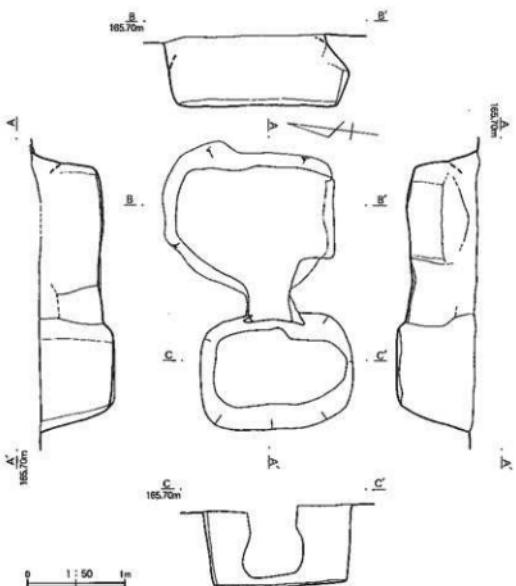


図14 3号地下式横穴墓実測図

幅を広げつつ玄室へと至る。1.17mの左側壁に対し、右側壁は0.87mと短い。床面は羨門奥にて一段上がり、その後わずかに上がり気味に玄室奥壁へと続く。玄室平面形は奥行1.04~1.12m、幅2.08mの平入り両袖長方形と考えられるが、東側壁はコーナーが丸みを帯びたまま羨道へと続く。壁面は崩落が酷く不明瞭ではあるが、やや外傾しながら立ち上がる。羨門～羨道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。玄室内への崩落土上より土師器1点が出土している。

(近沢)

遺物 7・土師器小型丸底壺 復元口径9.3cm、現存の器高7.7cmで、底部は焼成後に穿孔されている。外面調整は全体的にナデであるが、胴部上半において4mm程度のヘラ状工具によるミガキが施されている。また、胴部中ほどから底部にかけてはナデ調整以前にケズリが施されているとみられる。内面調整は頸部に粗いナデが認められるものの、口縁部、胴部においては丁寧なナデが施される。また、底部付近においては指押さえや工具痕も確認できる。

(藤井)

5号地下式横穴墓（図17）

遺構 調査区南側H・I-18グリッドで検出された。1号、4号地下式横穴墓の中間に位置する。玄室から羨道にかけて大きく崩落していた。1~9層は玄室崩落に伴う流入土、10~12層は豎坑埋土及び羨門からの流入土である。堆積状況の観察から羨門より豎坑埋土が玄室内に流入した後、玄室天井が崩落したと推測された。

地下式横穴墓の主軸は西である。豎坑平面形は長さ1.63m、幅1.75mの長方形を呈する。検出面からの深さは0.9m、床面は中央部にて一段下がり、そのまま羨道へと至る。壁面はやや外傾しながら立ち上がる。埋土は霧島御池輕石にごくわずかな黒褐色土を含む層が主体となる。羨門は豎坑西壁のほぼ中央に構築される。土層堆積に閉塞施設の痕跡が認められない点より、木材を使用した板閉塞と考えられた。羨道は羨門にて最大幅を測り、その幅を若干狭めつつ玄室へと至る。床面は玄室に向かいわずかに上がる。玄室平面形は奥行0.95m、幅1.88mの平入り両袖長方形を呈する。床面は羨道よりわずかではあるが低くなる。壁面は崩落が酷く不明瞭ではあるが、やや外傾しながら立ち上がる。羨門～

4号地下式横穴墓（図15・16）

遺構 調査区南側H・I-16・17グリッドで検出された。3号地下式横穴墓に隣接する。玄室から羨道の一部にかけて大きく崩落していた。1~7層は玄室天井崩落に伴う流入土、8~17層は豎坑埋土である。

地下式横穴墓の主軸は北東である。豎坑平面形は長さ1.75m、幅2.72m、横長の不整規円形を呈する。検出面からの深さは1.05m、床面は調査時に南西側を掘り過ぎており不明瞭であるが、ほぼ平坦であったと考えられる。壁面は緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土は霧島御池輕石に少量の黒色土・黒褐色土を含む層が主体となり、輕石を含む割合により細分された。堆積状況より羨門中位付近の11層上面にて一旦平坦面が形成されている状況がうかがえた。羨門は豎坑北東壁のほぼ中央、床面よりも10cm程度高い位置に構築される。閉塞は霧島御池輕石ブロック（16層）による羨門閉塞と考えられた。羨道は羨門付近にて最小幅を測り、その

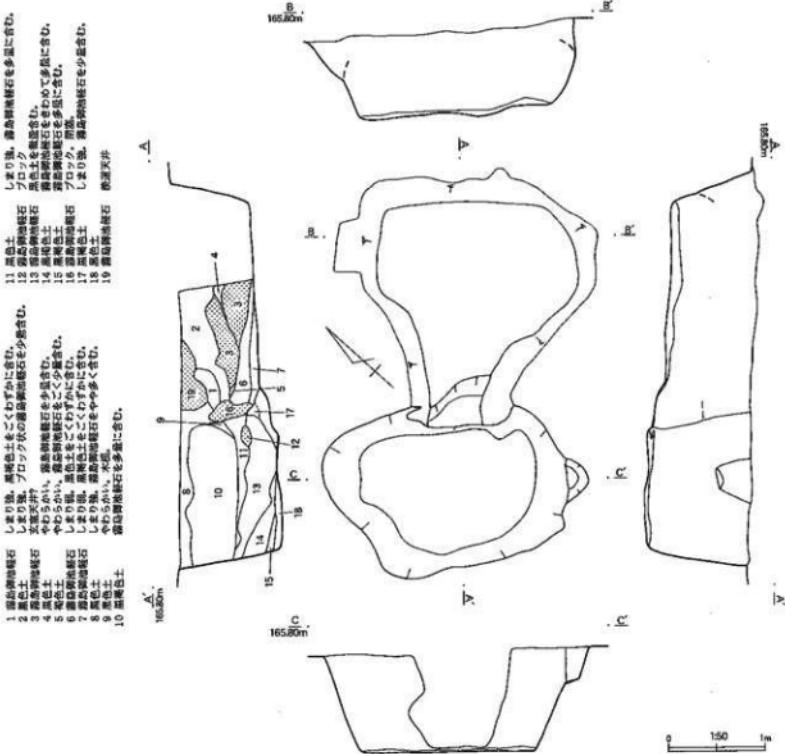


図15 4号地下式横穴墓実測図

羨道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。

(近沢)

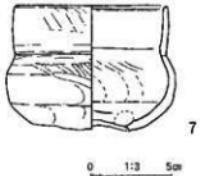


図16 4号地下式横穴墓出土遺物実測図

右袖に対し左袖が大幅に長い。床面は奥壁に向かい若干高くなる。壁面はほぼ直立し、天井は平面的であるが中央に向かい若干高くなる。箱型の立面形であったと考えられる。

(近沢)

6号地下式横穴墓（図18）

遺構 調査区南側G-16・17グリッドで検出された。3号、10号地下式横穴墓の中間に位置する。玄室から羨道にかけて崩落していた。

地下式横穴墓の主軸は西である。堅坑平面形は長さ0.91m、幅1.13mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.55m。床面は平坦で、壁面は若干外傾しながら立ち上がる。羨門は堅坑西壁のほぼ中央に構築される。

羨道は羨門にて最大幅を測り、その幅をわずかに狭めつつ玄室へと至る。玄室平面形は奥行0.34m、幅0.85mの平入り両袖長方形と考えられるが、

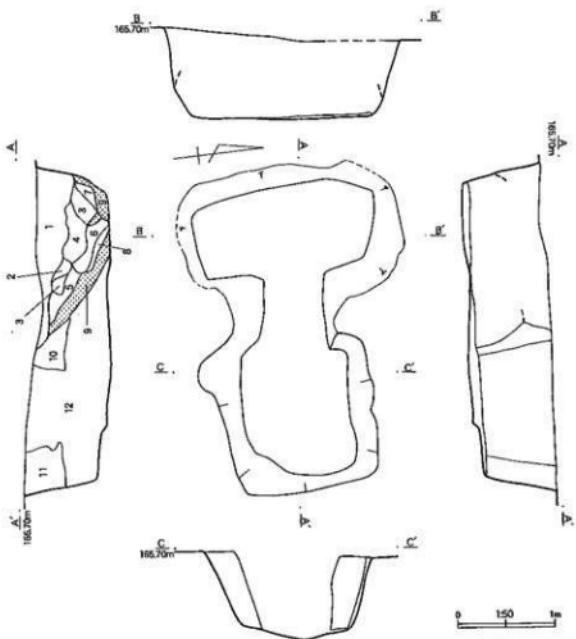


図17 5号式地下式横穴墓実測図

道にかけて崩落し、玄室北側は擾乱により破壊されていた。

地下式横穴墓の主軸は西南である。堅坑平面形は長さ1.01m、幅1.30mの不整円形を呈するが、北東側コーナーのみ明瞭に作り出されている。検出面からの深さは0.76m、床面は中央から北東部分にかけて一段下がり、そのまま狭道を抜け玄室へと至る。壁面はやや外傾しながら立ち上がる。埋土は上位の黒色土層、下位の霧島御池輕石に少量の黒色土を含む層に大別された。狭門は堅坑南西壁のほぼ中央に位置する。狭道は狭門付近にて最小幅を測り、その幅を広げつつ玄室へと至る。玄室平面形は奥行0.5~0.76m、現存幅1.15mを測り、平入り左片袖長方形の可能性が考えられた。床面はほぼ平坦で、壁面はやや外傾しながら立ち上がり、約25cmの高さで内側へと折れる。狭門～狭道～玄室にかけての立面形は崩落及び擾乱により不明である。

(近沢)

9号地下式横穴墓（図19・20）

遺構 調査区の中央南側G・H-13・14グリッドで検出された。玄室から狭道にかけて大きく崩落していた。

地下式横穴墓の主軸は東北である。堅坑平面形は長さ0.92m、幅2.31mの隅丸長方形であるが各コーナーの角度は緩く、梢円形に近い。検出面からの深さは0.5m、床面は狭門に向けて下がり、壁面は外傾しながら緩やかな角度で立ち上がる。埋土は霧島御池輕石に少量の黒色土を含む層が主体となる。狭道は堅坑東壁の中央や北よりに構築される。狭道は狭門付近にて最小幅を測り、その幅を広げつつ玄室へと至る。床面は玄室に向かいわずかに下がる。玄室平面形は奥行1.18m、幅1.67mの平入り両袖長方形を呈するが、コーナーはやや不明瞭であり、各辺は外側へと膨らみ梢円形に近い。床面はほぼ平坦である。壁面は崩落が酷く不明瞭ではあるが、緩やかな角度で外傾しながら立ち上がる。狭門～

7号地下式横穴墓（図18）

遺構 調査区南側F・G-15グリッドで検出された。玄室から狭道にかけて崩落していた。

地下式横穴墓の主軸は北西である。堅坑平面形は長さ1.04m、幅1.14mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.55m、床面はほぼ平坦で、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。狭門は堅坑北西壁のほぼ中央に構築される。狭道は狭門にて最大幅を測り、その幅を若干狭めつつ玄室へと至る。また0.4mの左側壁に対し、右側壁は0.25mと短い。玄室平面形は奥行0.37~0.5m、幅0.94mの平入り両袖橢円形を呈する。床面は奥壁、両側壁に向かい高くなり、壁面は内湾する。狭門～狭道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。

(近沢)

8号地下式横穴墓（図18）

遺構 調査区南側F-16グリッドで検出された。10号地下式横穴墓に隣接する。玄室から狭

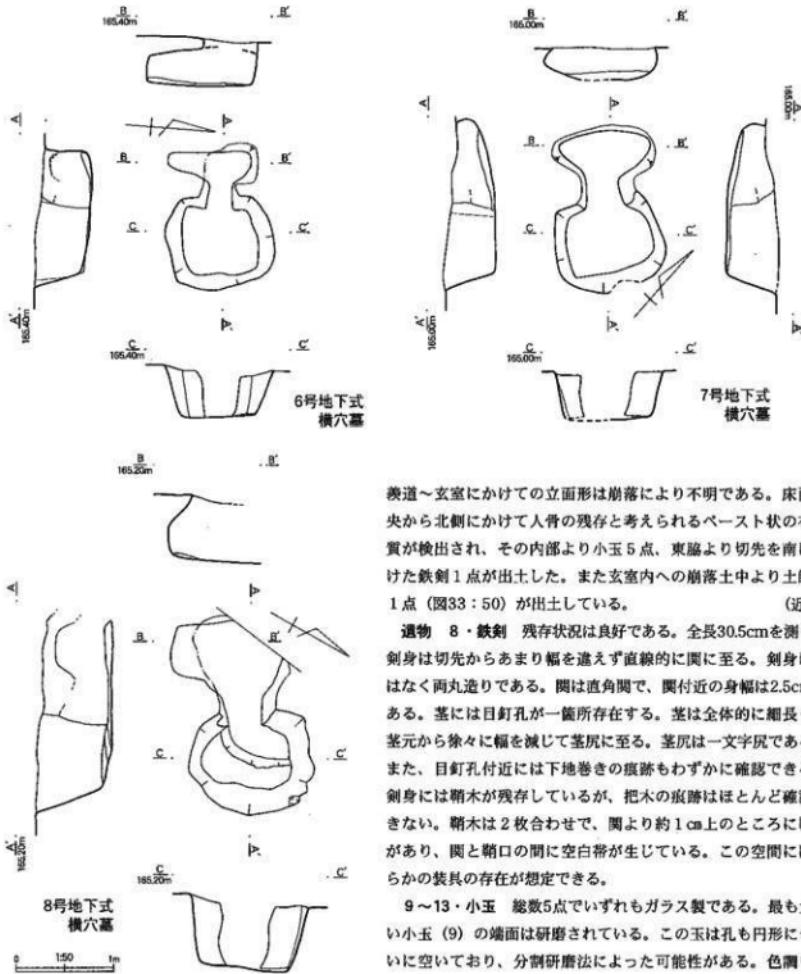


図18 6~8号地下式横穴墓実測図

似する3点(10~12)は淡青色を呈し、最小の小玉(13)は黄緑色を呈する。大きさと色調・素材に相関関係があり、3タイプの小玉からなる。

羨道～玄室にかけての立面形は崩落により不明である。床面中央から北側にかけて人骨の残存と考えられるペースト状の有機質が検出され、その内部より小玉5点、東脇より切先を南に向けた鉄劍1点が出土した。また玄室内への崩落土中より土師器1点(図33:50)が出土している。
(近沢)

遺物 8・鉄劍 残存状況は良好である。全長30.5cmを測り、劍身は切先からあまり幅を違えず直線的に間に至る。劍身に鍔はなく両丸造りである。闘は直角闘で、闘付近の身幅は2.5cmである。茎には目釘孔が一箇所存在する。茎は全体的に細長く、茎元から徐々に幅を減じて茎尻に至る。茎尻は一字型尻である。また、目釘孔付近には下地巻きの痕跡もわずかに確認できる。劍身には鞘木が残存しているが、把木の痕跡はほとんど確認できない。鞘木は2枚合わせで、闘より約1cm上のところに鞘口があり、闘と鞘口の間に空白帯が生じている。この空間には何らかの装具の存在が想定できる。

9~13・小玉 総数5点でいずれもガラス製である。最も大きい小玉(9)の端面は研磨されている。この玉は孔も円形にきれいに空いており、分割研磨法によった可能性がある。色調も他の小玉と異なっており分析は行っていないが素材が違っているとみられる。他の4点の小玉(10~13)はいずれも端面は表面張力によっており、引き伸ばし法によるとみられる。大きさの近

(藤井)

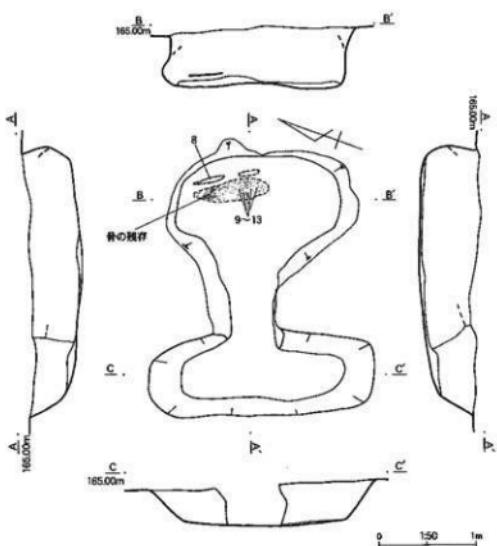


図19 9号地下式横穴墓実測図

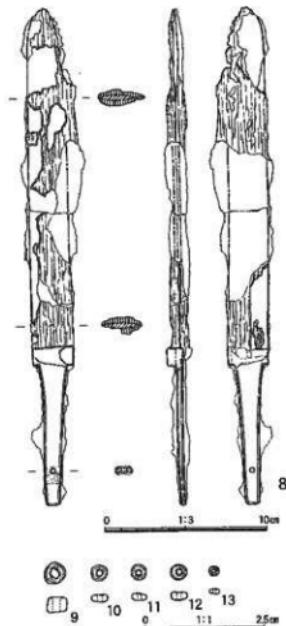


図20 9号地下式横穴墓出土遺物実測図

10号地下式横穴墓（図21・22）

遺構 調査区南側F・G-16グリッドで検出された。6号、8号地下式横穴墓の中間に位置する。玄室から狭道の一部にかけて崩落していた。1～5層は玄室天井崩落に伴う流入土、6～13層は堅坑埋土及び狭門からの流入土である。堆積状況の観察から堅坑埋土が玄室内に流入した後、玄室天井が崩落したと推測された。

地下式横穴墓の主軸は南東である。堅坑平面形は長さ1.35m、幅1.68mの隅丸長方形を呈するが、床面においてはコーナーがいずれも不明瞭で不整円形に近い。検出面からの深さは0.86m、床面は北側コーナーに盛り上がりをもち、壁面は若干外傾しながら立ち上がる。埋土は黒色土に少量の露島御池輕石を含む層が主体となる。また埋土中より土師器の小片が出土している。狭門は堅坑南西壁のほぼ中央に構築される。立面形は不整円形を呈する。土層堆積に閉塞施設の痕跡が認められない点より、木材を使用した板閉塞と考えられた。狭道は狭門付近にて最小幅を測り、その幅を広げつつ玄室へと至る。天井部は玄室に向かい大きく下がっていたと考えられた。玄室平面形は奥行0.96m、幅2.17mの平入り両袖隅丸三角形を呈するが、右袖に対し左袖が大幅に長い。各辺は外側へとやや膨らむ。床面は中央部が低く、奥壁、両側壁に向かい若干高くなる。壁面はやや外傾しながら立ち上がり、20～30cm程度の高さで内側へと折れる。玄室立面形は崩落により不明である。

遺物 14・土師器小型丸底壺 口縁部片である。復元口径は11.8cmで、外面には炭素が吸着し色調が黒色を呈することを特徴とする。胎土には1mm程度の石英や赤色粒子をわずかに含む。外面調整はヨコナデ、内面調整は板ナデのちヨコナデである。

(近沢)
(藤井)

11号地下式横穴墓（図23）

遺構 調査区中央西端D-9・10グリッドで検出された。12号地下式横穴墓と重複している。玄室から狭道にかけて崩落し、西側は擾乱により大きく破壊されていた。3～5層は崩落に伴う流入土、7～14層は堅坑埋土及び狭門からの

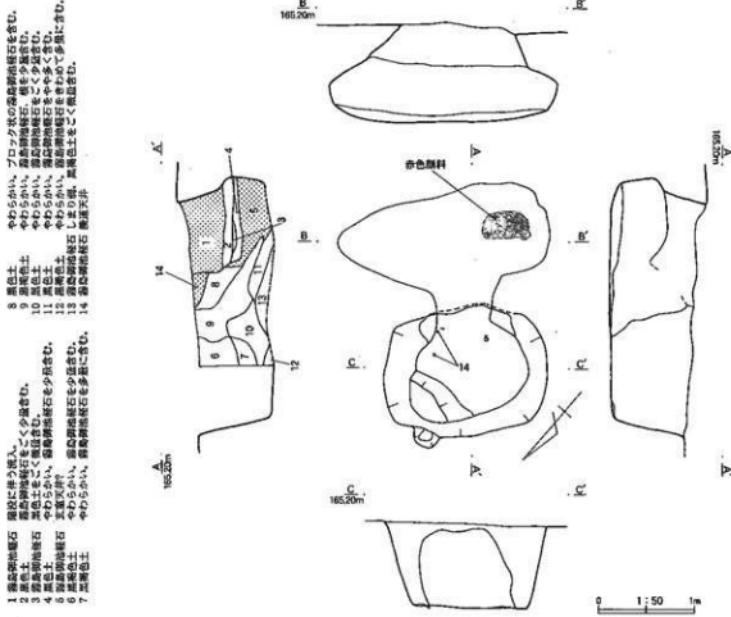


図21 10号地下式横穴墓実測図

流入土である。堆積状況の観察から義門より堅坑埋土が玄室内に流入した後、義道・玄室天井が崩落したと推測された。

地下式横穴墓の主軸は南西である。竪坑平面形は長さ2m、現存幅1.17mの隅丸長方形と考えられ、羨門に向かい浅い階段状となる。検出面からの深さは最大で0.66mを測る。壁面は外傾しながら緩やかな角度で立ち上がる。埋土は黒褐色にごく微量の鶴島御池駆駒石を含む層が主体となる。土層堆積に閉塞施設

(近沢)

12号地下式椭穴墓（图23）

遺構 調査区中央西端D-9・10グリッドで検出された。11号地下式横穴墓と重複している。玄室天井は崩落し、義道堅坑は調査区外である。

地下式横穴墓の主軸は調査区外の堅坑より玄室へと延びる東南と考えられた。玄室平面形は現存での奥行1.2m、幅1.75m、隅丸の長方形もしくは方形と考えられた。床面は平坦で、壁面はほぼ直角に立ち上がる。左壁は11号地下式横穴墓と重複し崩れている。玄室立面形は崩落により不明である。床面より植物繊維を編んだ敷物が確認され、その上に人骨の残存と考えられるペースト状の有機質、赤色顔料の塗布が検出された。また人歯1点が出土し5~12歳の小児との所見が出ている。

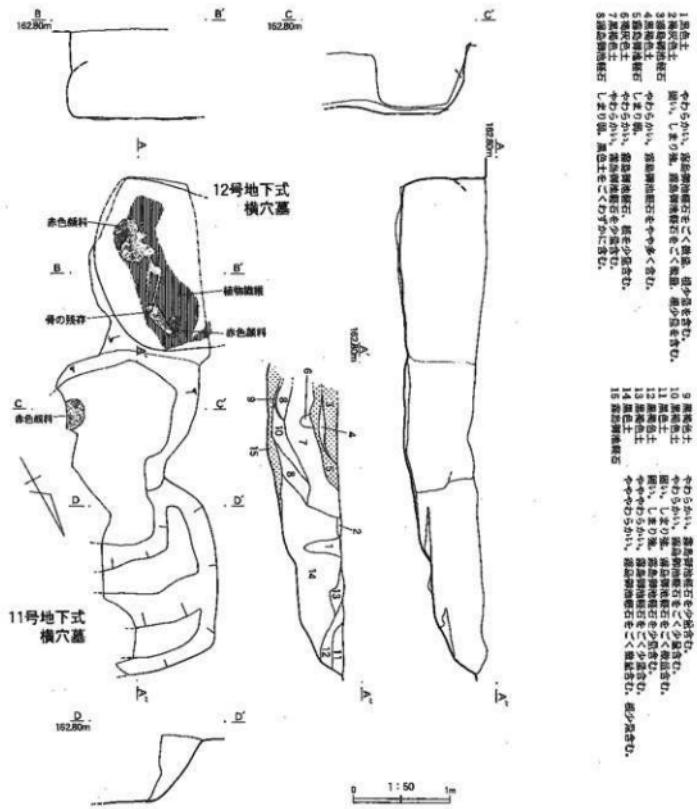


図23 11・12号地下式横穴墓実測図



図24 1号溝状遺構実測図

1号溝状遺構（図24）

遺構 調査区中位G～I-14・15グリッドにて検出された。検出された長さは約7mで、途切れながらも弧状をなす。幅は25～55cm、深さは6～10cmを測り、浅いU字状の立面形を呈する。また調査区北側土層（図5）にてもその断面が検出され、3層より掘り込まれていることが確認され、2号地下式横穴墓を横切り、円を描くように調査区外へと伸びる平面形であったと捉えられる。消失痕の周溝もしくは2号地下式横穴墓と関係する周溝状遺構の可能性が考えられた。（近沢）

1号土塙墓（図25・26）

遺構 調査区北側H・I-1～5グリッドにて検出された。長軸1.21m、短軸1mの不整橢円形を呈する。検出面からの深さが10cmとごく浅いが、調査区北側は全体的に霧島御池軽石層の上位までが削平されており、本遺構も上部が大きく削平された状態と考えられた。埋土は少量の霧島御池軽石を含む黒色土の1層である。また1・2号土塙墓に関しては調査時の不備によりそのレベルが未記録となっている。北側より鉄鋸1点、南側より刀子1点が出土している。（近沢）

遺物 15・鉄鋸 残存状況は全体的にはおおむね良好であるが、袋部は鏃ぶくれと肩状剥離が進行している。全長47cm、鋸身25cm、袋部16.8cmを測る。鋸身は鋸を有さず両丸造りで、切先から徐々に幅を広げて圓に至る。闊はナゼ闊で、闊付近の身幅は4.3cmである。袋部は内筒式で、先端部は山形抉り式である。目釘孔は片面のみ確認できたが、もう一方の位置が特定できない。鋸身・袋部には断片的に布あるいはその痕跡を確認することができる。布は平織りで糸の太さ0.4～0.6mm、織幅は絹糸1mm、緯糸0.6mmである。袋部内には木質が残存している。

16・刀子 残存状況は比較的良好であるが、切先部分が欠損している。現存長9.1cmで、刃側の外形線は、切先からふくらを有したのち緩やかに幅を広げながら刃部間に至る。闊付近の幅は1.5cmで、闊は斜闊である。茎は、茎元からほぼ幅を変えずに茎尻に至り、茎尻は鶏丸・一文字尻である。片面の刃部から茎にかけては、刀子主軸に対して斜位に木質が付着している。もう一方には革の可能性がある腐食した有機質が付着している。柄木は残存していないが茎には下地巻きが認められる。（藤井）

2号土塙墓（図25・27）

遺構 調査区北側H-4グリッドにて検出された。北西側を擾乱により破壊されているが、長軸1.42m、短軸1.35m、方形の平面形を呈していた可能性が考えられた。検出面からの深さが15cmと浅いが、調査区北側は霧島御池軽石層の上位までが削平されており、本遺構も1号土塙墓と同様に上部が大きく削平された状態と考えられた。埋土は霧島御池軽石にごく少量の黒色土を含む層が主体となる。南側コナーより銀鍔先1点、埋土中より管玉1点が出土している。（近沢）

遺物 17・方形鍔頭先 残存状況は比較的良好であるが、折り返し部は銅に覆われている。刃部左隅には副葬時以前のものとみられる欠損が確認できる。折り返し部の幅は約4cmで、X線写真の観察から折り返し部は約2～3mm幅で内側に折り曲げられていると判断した（図27-17：点線部分）。刃部幅は現状で12.1cmを測り、欠損部を復元すると12.9cmとなる。なお、この例は展開図のように縦6.5cm、横19.9cm、厚0.35cm以上の鉄板を素材としている。着柄部付近には、鏃ぶくれが認められる部分がある。一般的な銅とは異なり、粒子が細かく有機質、あるいは土が銅化したようにもみえるが、詳細は不明である。

18・管玉 碧玉製で灰緑色を呈する。長さ2cm、径0.3cmを測る。（藤井）

3号土塙（図25・27）

遺構 調査区北端G-3グリッドで検出された。北側を擾乱により破壊されている。北側の一段目と1段低くなる南側二段目からなる2段掘りの土塙で、主軸は南東である。二段目の壁面は若干外傾しながら立ち上がり約10cmの高さで内側へと折れる。袋状の立面形とも捉えられるが天井を形成していた可能性もある。二段目内より鉄劍1点が出土し赤色顔料の塗布が確認された。二段目の形状と出土遺物より、浅く小規模ではあるが地下式横穴墓の可能性も考えられた。（近沢）

遺物 19・鉄劍 残存状況が悪く、銅に覆われたうえ、4つに割れた状態であったためX線写真をもとに図上で復元した。切先部分は欠損している。現存長は40.5cmを測り、劍身は切先からやや幅を広げつつ刃部間に至る。劍身に銅はみられず両丸造りである。闊は直角闊で、闊付近の身幅は3.1cmである。茎には4箇所の目釘孔が確認できる。茎はやや幅を減じながら茎尻に至り、茎尻は一文字尻である。劍身下半には布の痕跡、茎には把木の一部が確認できる。（藤井）

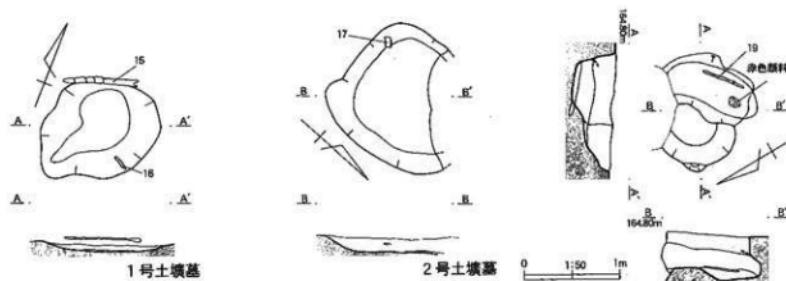


图25 1~3号土壤墓实测图

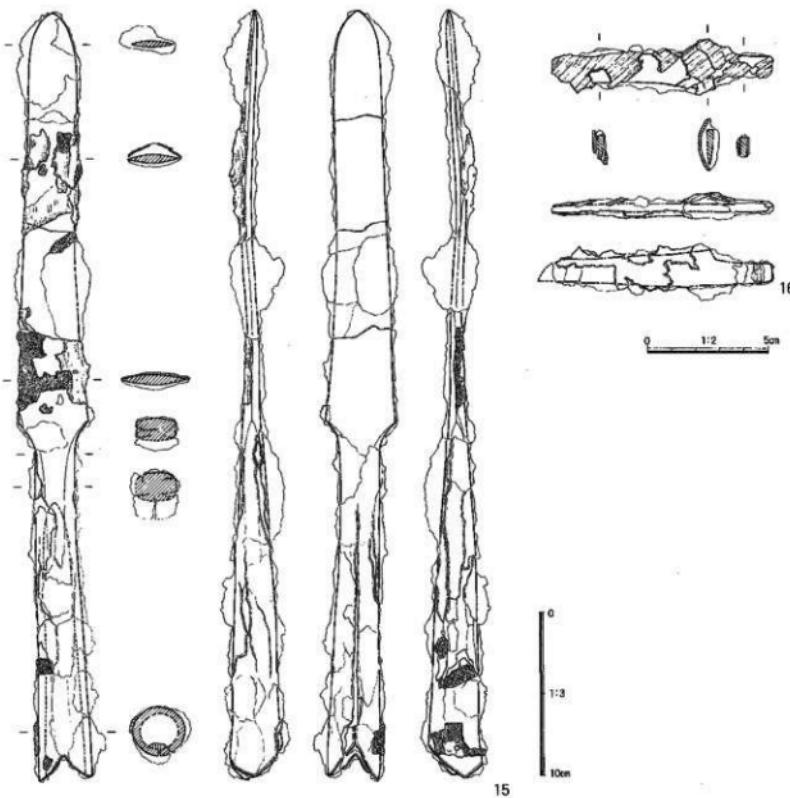
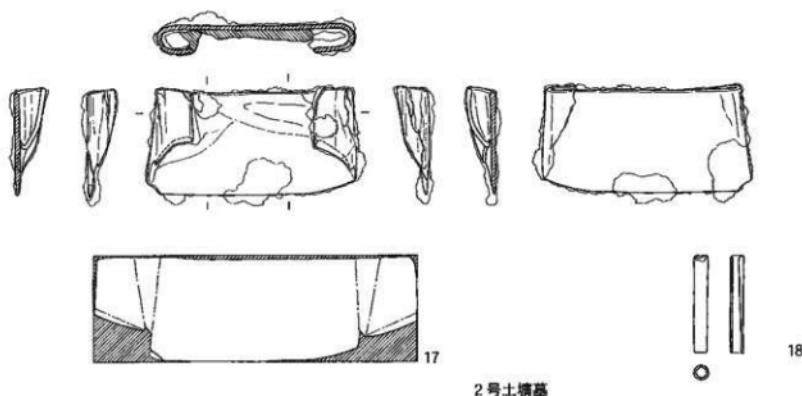


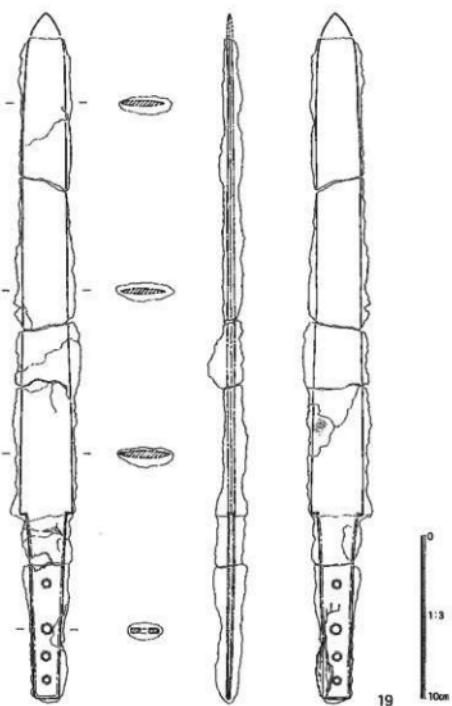
图26 1号土壤墓出土遗物实测图



2号土壤墓

0 1:1 25cm
(18)

0 1:3 10cm
(17)



3号土壤墓

图27 2·3号土壤墓出土遗物实测图

III 中世の遺構・遺物

掘立柱建物跡群

遺構 掘立柱建物跡は合計15棟が確認され、調査区中央部に11棟が集中する。建物の桁行方向よりI類(東)、II類(北)、III類(その他)。構造より1類(桁行3間×梁間1間)、2類(桁行3間×梁間2間)、3類(その他)。桁行・梁間の規模よりA類(桁行6.5~6.9m・梁間4.3~4.7m・面積29~32m²)、B類(桁行6.2~6.4m・梁間3.4~3.5m・面積21~24m²)、C類(その他)に分類した。また10~15号掘立柱建物跡は調査区外等へと拡大すると考えられ、桁行・梁間の規模から構造を復元している。I-1-A類が5棟(2・5・6・13・15号掘立柱建物跡)、I-1-C類が1棟(14号掘立柱建物跡)、I-2-B類が2棟(3・4号掘立柱建物跡)、I-3-C類が2棟(1・7号掘立柱建物跡)、II-1-A類が1棟(9号掘立柱建物跡)、II-1-B類が1棟(10号掘立柱建物跡)、II-2-B類が2棟(11・12号掘立柱建物跡)、III-1-B類は1棟(8号掘立柱建物跡)となる。軸方向ではI類が10棟と主体となっていた。構造では1類が9棟と多く、2類が4棟と続く。規模ではA類が6棟、B類が5棟とほぼ同数であり、最も大きな建物跡は一面庇が付く1号掘立柱建物跡で、身舎の規模は桁行4間(8.2m)、梁間3間(5.5m)であった。また11棟が集中する調査区中央では全ての建物跡が重複し、5・6・8号掘立柱建物跡のように柱穴自体が重複している状況も観察された。

(近沢)

1号配石遺構(図31・33)

遺構 調査区北側G-7グリッドで検出された。2号箱式石棺墓に重複し、かつ櫻乱により南下半を破壊されている。現存での長軸1.6m、短軸0.97mを測り、平面形は長方形である。土壇の上部に長径30cm程度の自然石25点を敷き詰め、配石面の上下には灰を多量に含み、固くしまる灰黄褐色土の堆積が確認された。配石上面より青磁小片が出土している。

(近沢)

4号土壤(図31・33)

遺構 調査区北側G-7グリッドにて検出された。長軸0.88m、短軸0.76mの不整円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。西隅より鉄製品1点が出土している。

(近沢)

遺物 20・鉄製品 全長11cm、最大身幅2.9cmを測る。全体的に鋸に覆われており、有機質の付着物は確認できない。側縁片面側は刃部を作り出しや直線的な外形であるが、一方の背側は緩やかに弧を描く。一般的な形状とは異なるため断定は難しいが、平面形から鎌と推測する。

(藤井)

5号土壤(図31・33)

遺構 調査区北側H-8グリッドにて検出された。長軸1.26m、短軸1.18mの円形を呈する。検出面からの深さは24cmを測る。ほぼ中央より土師器1点が出土している。

(近沢)

遺物 21・土師器小皿 底部切離しは回転糸切離しである。底部から体部下半にかけて膨らみをもち、体部上半から口縁部にかけてわずかに外反する。内面調整は何らかの当て具を使用した回転ナデと考えられた。

(近沢)

6号土壤(図31・33)

遺構 調査区北側H-6グリッドにて検出された。長軸1.71m、短軸0.97mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは156cmと深く、底面は平坦で長軸0.82m、短軸0.42mの長方形を呈する。

(近沢)

7号土壤(図31・33)

遺構 調査区中位H-12グリッドにて検出された。2段掘りの土壤である。検出面での平面形は長軸2.82m、短軸1.82mの橢円形を呈し、63cmの深さで一段目の平坦面を形成する。平坦面のほぼ中央に長軸と平行し長軸2.2m、短軸0.67m、長方形を呈する二段目の土壤が形成され、一段目からの深さは122cm、底面は平坦で壁面はほぼ直立する。また二段目は霧島御池輕石層を抜け、その下位の黒色土層を掘り込んでいる。埋土は一段目では霧島御池輕石を含む黒褐色土層、二段目では灰や粘土を含む黒色土層が主体となる。埋土中より青磁片、瓦質土器片が出土している。

(近沢)

遺物 22・瓦質土器火鉢 口縁部である。23・龍泉窯系青磁折継御目盤 口縁部である。口縁部が短く屈曲し、

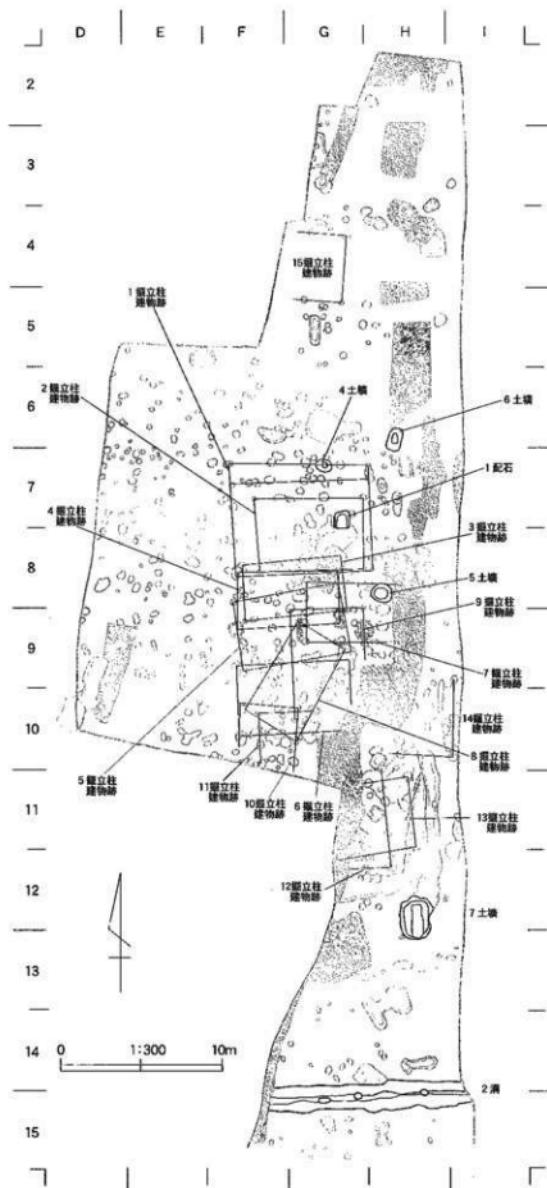


図28 中世遺構分布図 ■――擾乱

外面は無文で内面に櫛目文を施す。
(近沢)

2号溝状遺構 (図32・33)

遺構 調査区中位G～I-14・15グリッドにて検出された。東一西方向に11.5mの長さが確認され、両端共に調査区外へと拡大すると考えられる。幅は1.3～1.8m、検出面からの深さは0.8～1mを測り、V字状の立面形を呈する。また土層の上位には白色軽石が文明3（1471）年噴出の桜島文明軽石と考えられる。溝内より備前焼片が出土している。

(近沢)

遺物 24・備前焼捲鉢 口縁部片である。口縁端部を幅広に造り出し、内面には8条1単位の櫛目が見られる。

(近沢)

包含層出土遺物 (図33)

25～29・青磁 25は龍泉窯系青磁碗口縁部～体部片である。口縁部は直口し外面上に鍊連弁文を施す。26は龍泉窯系青磁杯である。体部は丸みをもちら立ち上がり、口縁部は外反する。内外面共に無文で見込みと高台内の軸を搔き取る。27・28は青磁碗口縁部～体部片で口縁部が外反する。内外面共に無文である。29は青磁碗底部片である。角高台で高台外端を面取りし、高台内は無軸である。

30～50・土器器 器形・焼成・調整等より30～47と48・49・50に大別される。30～43は坏である。小片が多く全形が復元できたものは30のみであり、やや小さめの底部から口縁部にかけて大きく聞く器形となる。いずれも30と同様の器形と考えられ、外面の調整により細分された。体部下端に横方向のナデ調整を施すもの（30～35）。底部から体部にかけてやや丸みを帯びるもの（36～39）。

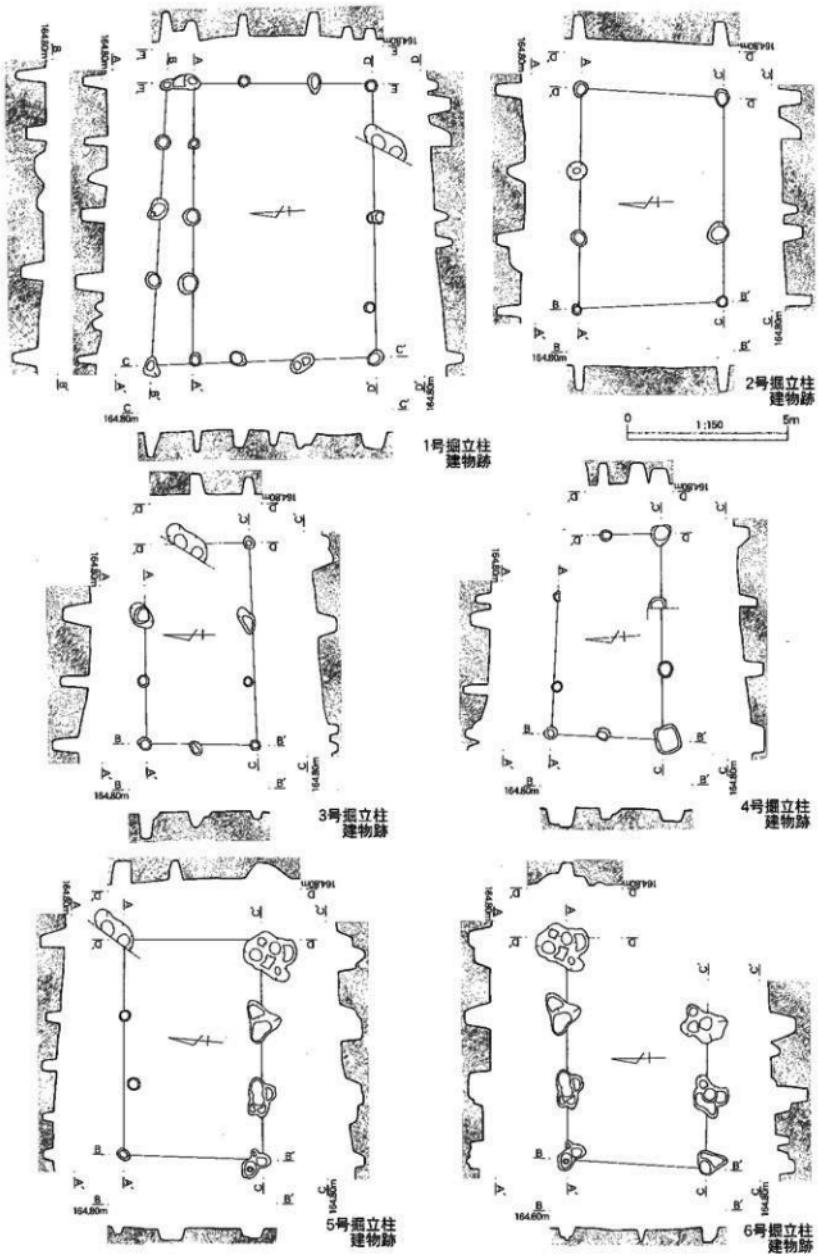


図29 1～6号堀立柱遺物跡実測図

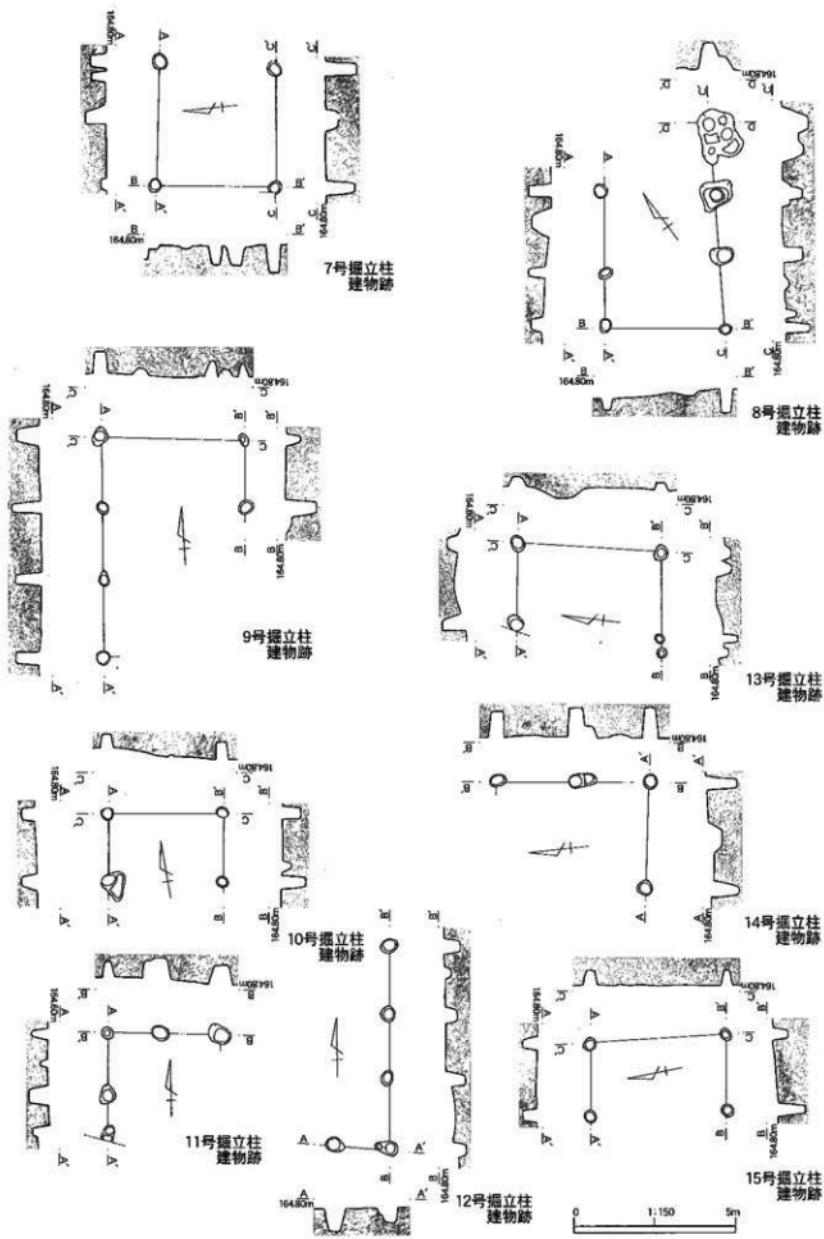


图30 7~14号掘立柱建物跡実測図

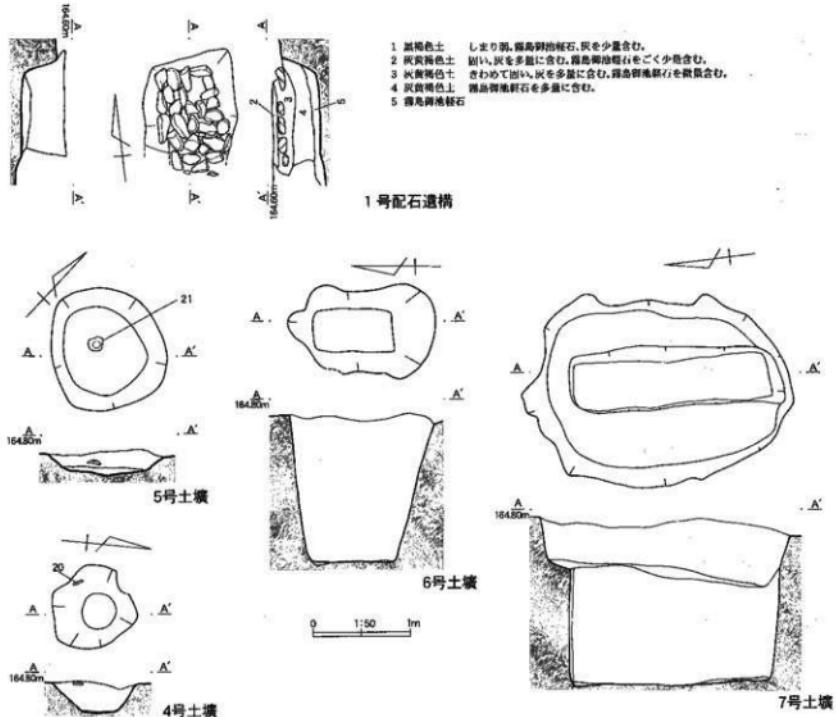


図31 1号配石造構・4~7号土壤実測図

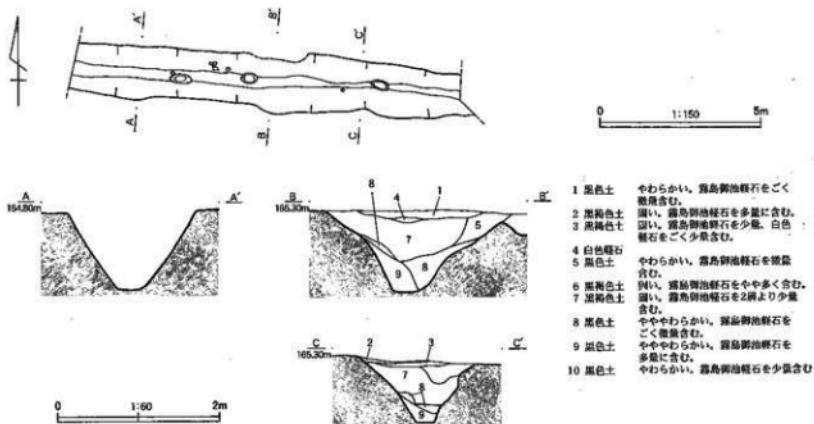


図32 2号溝状造構実測図

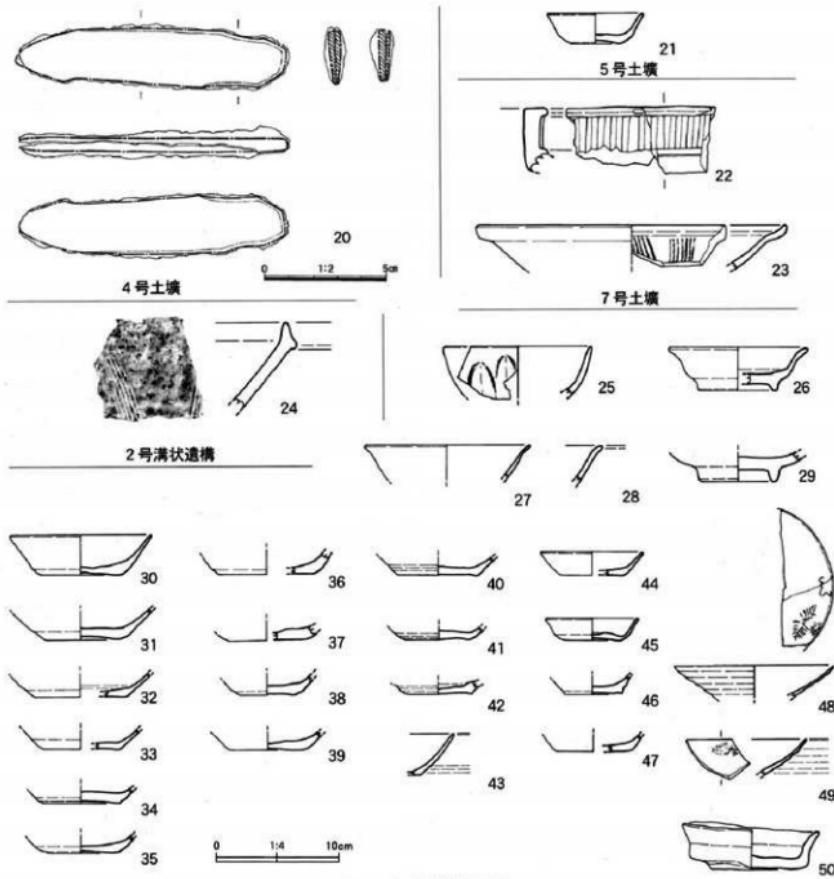


図33 中世遺物実測図

体部下半に幅の狭い明瞭なロクロ目が残り段状をなすもの(40~43)となる。また各類共に内面における底部と体部との境は不明瞭で、調整が残るものについては何らかの当て具を用いた回転ナデ調整が見られた。44~47は小皿である。44は底部から口縁部にかけて直線的に聞く。45は底部から体部下半にかけて膨らみをもち、体部上半から口縁部にかけて外反する。口縁部に炭化物の付着が見られ灯明皿としての使用が考えられた。46は底部下端が張り出し、体部はやや膨らみながら立ち上がる。47は底部から体部にかけてやや膨らみながら立ち上がる。いずれも内面での底部と体部との境は不明瞭で何らかの当て具を用いた回転ナデ調整を施す。杯・小皿共に底部切離しはすべて回転糸切離しであった。

48・49は杯である。他の土師器に比べ器壁が薄く焼成は堅継である。外面にはロクロ目が明瞭に形成され、内面には木葉と見られる墨書きを行う。49は口縁部に炭化物の付着が見られ灯明皿としての使用が考えられた。また48・49は接合はならなかったものの調整・焼成や墨書きの関係より同一固体と考えられる。50は杯である。9号地下式横穴墓玄室崩落土内の天井を構成していた霧島御池輕石層より上層の黒色土中より出土した。底部は薄い円盤状を呈し、体部は一旦開いた後に屈曲し、外反しながら口縁部へと至る。他の土師器に比べ器壁が厚く、焼成も甘い。

(近沢)

表 1 箱式石棺墓計測値一覧

主軸	基盤(m)		石棺内法(m)		石材数(枚)						小口・長側石 組み方	長側石 組み方	面窓 蓋七	赤色 顔料	人骨	備考	
	長さ	幅	高さ	小口幅	長さ	蓋石	小口石	長側石	底石	蓋石上 外板石	長側石 外板石	底石					
1 N-74° E	2.97	1.50	0.64	東 0.52	1.63	3	東 1	北 5	5	2	東 23	北 9	II型	●	○	1 鉄劍1	
2 N 72° E	-	-	-	西 0.25	-	(5-6)	-	-	(4-5)	-	南 9	-	-	-	-	-	鐵劍破片1

表 2 地下式横穴墓計測値一覧

主軸	玄室			通路			堅坑・奥出面			堅坑・底面			閉塞	人骨	赤色 顔料	備考
	進行(m)	幅(m)	高さ(m)	進行(m)	幅(m)	高さ(m)	進行(m)	幅(m)	高さ(m)	進行(m)	幅(m)	高さ(m)				
1 N-60° W	2.13	0.55-1.05	(0.62)	0.65	0.57	-	1.75	1.52	(0.86)	1.50	1.02	-	-	-	-	鐵劍1・刀子1
2 N-6° W	1.10	1.90	-	0.65	0.52	0.65	-	1.83	1.99	(1.10)	1.36	1.49	板?	△	刀子1	-
3 N-42° E	0.95-1.18	1.62	(0.63)	0.40-0.65	0.45	-	1.18	1.55	(0.84)	0.76	1.35	-	-	-	-	土器群
4 N-47° E	1.04-1.12	2.08	-	0.87-1.17	0.55	0.60	1.75	2.72	(1.06)	1.25	1.77	青銅鋸石?	-	-	-	-
5 N-63° W	0.95	1.88	-	0.46	0.27	0.25	-	0.91	1.13	(0.55)	0.65	0.76	板?	-	-	-
6 S-85° W	0.34	0.85	(0.38)	-	0.27	0.25	-	1.04	1.14	(0.55)	0.68	0.9	-	-	-	-
7 N-42° W	0.37-0.50	0.94	-	0.26-0.40	0.35-0.42	-	1.01	1.30	(0.76)	0.60	0.93	-	-	-	-	-
8 S-61° W	0.50-0.76	(1.15)	(0.48)	0.31	0.34-0.45	-	-	-	-	-	-	-	残片	-	-	鐵劍1・小玉5
9 N-70° E	1.18	1.67	-	0.80	0.50-0.60	-	0.92	2.31	(0.50)	1.68	0.54	-	-	-	-	壁面より上部断面小片
10 S-41° E	0.96	2.17	(0.60)	0.46	0.54-0.65	0.62	1.26	1.68	(0.86)	1.00	1.15	板?	-	-	-	-
11 S-29° W	0.95	(1.22)	-	0.45	-	-	2.0	(1.17)	(0.66)	1.70	(0.97)	板?	○	-	-	鉄剣破片
12 -	-	(1.2)	1.75	-	-	-	-	-	-	-	-	-	残片	-	-	-

表 3 土壙計測値一覧

主軸	長さ(m)		幅(m)		高さ(m)		備考	5	土輪		長さ(m)		幅(m)		閉塞	備考
	長	短	幅	高	幅	高			5	6	N-4° E	7	S-5° E	8		
1 S-69° W	1.21	1.0	0.3	-	-	-	鐵劍1・刀子1	-	1.26	1.18	0.24	-	-	-	-	土跡跡1
2 -	-	1.42	1.35	-	0.35	-	銀鏡先1・天玉1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3 S-35° E	-	(後日)-0.66	-	一段目(0.50)	-	一段目-0.3	銀鏡1・赤色顔料	-	-	-	一段目-2.82	-	一段目-1.92	-	-	後日-0.63 青銅・瓦質土器
4 -	-	0.88	0.76	-	0.3	-	二段目-0.98	-	二段目-2.82	-	二段目-2.2	-	二段目-0.57	-	-	後日-1.22

表 4 堀立柱建物跡計測値一覧

主軸	構造		柱間数(列)×面		幅(m)		相行(列)		築行(列)		面積(m)		柱穴径(cm)		柱穴深(cm)	分類	備考
	長	短	幅	高	幅	高	幅	高	幅	高	幅	高	幅	高			
1 S-88° E	側柱	-	身柱	4×3	身柱-8.2×5.5	身柱-1.6~2.9	1.8~2.2	身柱-4.5	20~60	20~80	1~3-C	-	-	-	-	-	-
2 S-88° E	側柱	3×1	身柱	6.5×4.5	身柱-8.5	身柱-1.7~2.8	2.0~2.1	身柱-4.5	40~70	30~90	-	-	-	-	-	-	-
3 S-90° E	側柱	3×2	身柱	6.2×3.4	身柱-8.5	身柱-1.8~2.5	1.8~2.0	身柱-4.5	21	30~40	20~90	1~2-B	-	-	-	-	-
4 S-87° E	側柱	3×2	身柱	6.4×3.5	身柱-8.5	身柱-1.6~2.8	1.7~2.0	身柱-4.5	22	30~70	30~70	1~2-B	-	-	-	-	-
5 N-85° E	側柱	3×1	身柱	6.7×4.3	身柱-8.5	身柱-2.2~2.7	2.4~4.3	身柱-4.5	20~30	30~80	1~1-A	-	-	-	-	-	-
6 S-90° E	側柱	3×1	身柱	6.8×4.3	身柱-8.5	身柱-2.0~2.3	2.0~2.3	身柱-4.5	29	-	50~110	1~1-A	-	-	-	-	-
7 S-85° E	側柱	1(1)×1	身柱	(3.8)×3.7	身柱-8.5	身柱-3.6~3.9	3.7	身柱-4.5	40~50	20~90	1~3-C	-	-	-	-	-	-
8 N-37° E	側柱	3×1	身柱	6.4×3.7	身柱-8.5	身柱-1.7~2.5	1.7~2.5	身柱-4.5	24	30~70	40~80	B-I-B	-	-	-	-	-
9 N-3° E	側柱	3×1	身柱	6.9×4.7	身柱-8.5	身柱-2.2~2.5	2.2~2.5	身柱-4.5	32	40~60	40~90	B-I-A	-	-	-	-	-
10 N-12° E	側柱	1(1)×1	身柱	(2.1)×1.6	身柱-8.5	身柱-2.0~2.1	2.0~2.1	身柱-4.5	40	40~70	40~70	(B-I-B)	-	-	-	-	-
11 N-2° E	側柱	3(3)×2	身柱	(3.3)×3.5	身柱-8.5	身柱-1.9~2.0	1.9~2.0	身柱-4.5	40~70	50~60	(B-II-B)	-	-	-	-	-	-
12 N-1° E	側柱	3(3)×1	身柱	(6.3)×1.8	身柱-8.5	身柱-2.0~2.3	2.0~2.3	身柱-4.5	50~70	40~70	(B-II-B)	-	-	-	-	-	-
13 N-84° E	側柱	1(1)×1	身柱	(2.6)×4.5	身柱-8.5	身柱-2.5~2.7	2.5~2.7	身柱-4.5	40~70	30~50	30~70	(1~1-A)	-	-	-	-	-
14 S-82° E	側柱	1(1)×2	身柱	(3.4)×4.7	身柱-8.5	身柱-3.4	3.4	身柱-4.5	40~80	70~100	1~1-C	-	-	-	-	-	-
15 S-79° E	側柱	1(1)×1	身柱	(2.4)×4.2	身柱-8.5	身柱-2.4	2.4	身柱-4.5	40	40~80	(1~1-A)	-	-	-	-	-	-

表 5 溝状造構計測値一覧

主軸	長さ(m)		上幅(m)		下幅(m)		高さ(m)		備考	1 N-8° E	面積(m)		柱穴径(cm)		柱穴深(cm)	備考
	長	短	幅	高	幅	高	幅	高		(1.06)	0.97	0.57	青銅小片	青銅		
1.1	-	(0.65)	0.25	0.12	0.1	0.06	0.06	周囲状況	-	-	-	-	-	-	-	-
1.2	-	(4.2)	0.25-0.55	0.15-0.2	0.06-0.1	0.06-0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1.3	-	(2.0)	0.4	0.25	0.25	0.08	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 S-85° E	-	(1.15)	1.3~1.8	0.1~0.5	0.5~1.0	0.5~1.0	周囲状況	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表 8 刀子計測値一覧

遺物名	残存長 (cm)		全长 (cm)		刃幅 (cm)		刃厚 (cm)		柄	周囲状況	表面(cg)		底面(cg)		柄	
	残存長 (cm)	全长 (cm)	刃幅 (cm)	全长 (cm)	刃幅 (cm)	刃厚 (cm)	刃幅 (cm)	刃厚 (cm)			周囲状況	表面(cg)	底面(cg)	周囲状況		
5 地下式	10.2	9.9	5.9	1.7	0.3	0.45	0.3	0.15	○	直角	10.8	2.3	1.3	内斜一字	1	0.65×5
4 1号地下式	27.5	27.0	21.1	3.7	3.7	3.1	3.0	0.4	△	直角	5.9	2.6	1.0	内斜一字	2	0.4×0.64 0.65×0.5
8 9号地下式	30.5	30.5	21.9	2.5	0.475	2.5	2.5	0.4	○	直角	8.6	1.8	0.85	内斜一字	1	0.3×0.3
19 上草薙	40.5	(42.0)	29.2	3.1	?	直角	11.3	2.5	△	直角	2.5	1.55	-	一字半	4	0.4×0.64 0.65×0.5
16 1号草薙	9.1	(9.7)	5.8	0.72	1.5	0.3	1.7	0.4	△	直角	2.4	1.1	0.65	内斜一字	不明	0.6×0.6 0.6×0.4

表9 鉄錆計測値一覧

測定名	残存長(cm)	全長(cm)	鉄錆計測値(cm)				周	鉄錆の状況		
			錆食長	通り	断面	最大幅		露部長	断面	端部
15 土壌	47.0	47.0	25.0	丸丸	0.7	4.3	ナデ	16.8	丸開	山形決

表10 玉類計測値一覧

遺物名	種別	材質	色調	珠(直径X厚)	径(最大X高)	孔(最大X深)	孔(穿孔)	感度	直角状況
9 地下式	小玉	ガラス	青	3.0	4.5	2.0	平滑	伊勢	完存
10 地下式	小玉	ガラス	透青透明	1.6	3.5	1.0	平滑	表面無力	完存
11 地下式	小玉	ガラス	透青半透明	1.75	3.2	0.8	平滑	表面無力	完存
12 地下式	小玉	ガラス	透青半透明	1.95	3.4	0.8	平滑	表面無力	完存
13 地下式	小玉	ガラス	無色	1.2	1.0	0.2	平滑	表面無力	完存
15 2上輪轍	管玉	透青	灰緑色	20.0	3.0	1.8-1.4	片面	片面凹凸・片面削割	完存

表11 陶磁器計測値一覧

出土位置	種別	胎焼	法面積(cm)			手法・文様	色調	土色	備考
			口径	底径	腹高				
26 上輪轍	瓦質土器	火葬	-	-	-	外輪面	内輪面	外面	裏面
23 土塊	青磁	鏡	(26.1)	-	-	基輪	御印・旋渦	緑灰色	灰白色
24 2消	鏡前	輪鉢	-	-	-	四輪ナデ	西軸ナデ	緑灰色	灰褐色
25 包含層	青磁	鏡	(12.0)	-	-	施輪	施輪	緑灰色	灰褐色
26 包含層	青磁	环	(11.2)	(6.3)	3.5	施輪・高台内輪鉢	施輪・見込み模様	緑灰色	灰白色・褐色
27 包含層	青磁	鏡	(13.4)	-	-	施輪	施輪	緑灰色	灰褐色
28 包含層	青磁	鏡	-	-	-	施輪	施輪	緑灰色	灰白色
29 包含層	青磁	鏡	-	-	6.1	施輪・合口内輪鉢	施輪	緑灰色	灰白色

表12 土器師計測値一覧

出土位置	胎焼	法面積(cm)			手法・文様	色調	土色	備考	
		口径	底径	腹高					
2 1消前	鏡	-	-	-	ナデ	ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
7 4号下式	小口鋸	(9.3)	-	(2.7)	ナデ・横ミタキ	ナデ	にい・緑色	1mm以下の石粉微少量・灰白色少量 施輪穿孔	
14 10号下式	小口鋸	(11.8)	-	-	ナデ	黒	明る青色	1mm以下の石粉・施輪少量	
21 5.2消	小鏡	(7.8)	4.0	2.5	四輪ナデ	四輪ナデ	緑灰色	施輪少量	
30 位付鏡	坪	11.5	6.5	3.3	四輪ナデ	四輪ナデ	緑灰色	施輪少量	
31 位付鏡	坪	-	5.1	-	四輪ナデ・一部ナデ	四輪ナデ	緑灰色	施輪少量	
32 位付鏡	坪	-	(7.3)	-	四輪ナデ・一部ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
33 位付鏡	坪	-	(6.2)	-	四輪ナデ・一部ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
34 位付鏡	坪	-	(6.3)	-	四輪ナデ・一部ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量・施輪少量	
35 位付鏡	坪	-	(5.4)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量・施輪少量	
36 位付鏡	坪	-	(7.2)	-	ナデ	ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
37 位付鏡	坪	-	(6.2)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
38 位付鏡	坪	-	(6.5)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
39 位付鏡	坪	-	(6.0)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量・施輪少量	
40 位付鏡	坪	-	(6.4)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
41 位付鏡	坪	-	(5.4)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
42 位付鏡	坪	-	(5.3)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
43 位付鏡	坪	-	(5.3)	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
44 位付鏡	小鏡	(8.3)	2.0	-	ナデ	四輪ナデ・施輪	にい・緑色	1mm以下の石粉微少量	
45 位付鏡	小鏡	(7.6)	4.6	1.8	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
46 位付鏡	小鏡	-	4.8	-	ナデ	四輪ナデ	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
47 位付鏡	小鏡	-	(8.2)	-	ナデ	四輪ナデ・施輪	四輪ナデ	1mm以下の石粉微少量・施輪少量	
48 位付鏡	坪	-	(13.0)	-	四輪ナデ	四輪ナデ・施輪	淡青色	1mm以下の石粉微少量	
49 位付鏡	坪	-	-	-	四輪ナデ	四輪ナデ	淡青色	施輪少量	
50 9号下式	坪	-	11.5	7.2	3.5	四輪ナデ	四輪ナデ	不明	1mm以下の石粉微少量

6. 平成16年度(2004)調査

I 層序 (図35)

本調査区は牧ノ原遺跡群内に展開する古墳群のほぼ中央に位置している。北へ約50mの地点には10号墳があり、10号墳と本調査区との間では昭和42年に箱式石棺2基が発見調査されている。調査区東側が台地に対し南北に入る谷に面しており、東へ向かい緩やかな傾斜をもつ。基本層序は次のとおりである。

- 1層・造成土 (層厚約1m)
- 2層・黒褐色土 (固い。しまり強。)
- 3層・黒褐色土 (固い。しまり強。白色軽石を微量含む。2層よりやや明るい。)
- 4層・黒褐色土 (固い。しまり強。霧島御池軽石を微量、赤色粒子を微量含む。)
- 5層・黒色土 (固い。しまり強。霧島御池軽石を微量含む。)
- 6層・黒褐色土 (固い。霧島御池軽石を微量含む。)
- 7層・黒褐色土 (しまり強。霧島御池軽石を微量含む。)
- 8層・黒褐色土 (固い。しまり強。霧島御池軽石をごく少量含む。)
- 9層・暗褐色土 (固い。ブロック状の霧島御池軽石を含む。)

10層・霧島御池軽石層

また図35には反映されていないが、昭和40・50年代に実施されたは場整備により全城にわたり1m程度の盛土がなされていた。遺構検出は8層上面及び10層上面で行った。調査前は畑地として利用されていた。
(近沢)

II 古墳時代の遺構・遺物

1号箱式石棺墓 (図36・37)

遺構 調査区東側C・D-4・5グリッドにて検出された。上部が擾乱により破壊され、北側一部は調査区外に位置する。石棺墓の主軸は西一束である。

墓壙の検出面での平面形は長さ3.32m、幅1.82mの長方形を呈する。検出面からの深さは0.52m、床面は平坦で、壁面はわずかに外傾しながら立ち上がる。埋土は下位の霧島御池軽石にごく少量の黒色土を含む層(7・9・10層)と上位の黒色土に少量の霧島御池軽石を含む層(6層)とに大別される。壁面の堆積状況の観察から11層より墓壙が掘り込まれており、11層上面からの深さは1.08mを測る。

石棺は墓壙のほぼ中央に構築される。墓壙に対しその主軸はわずかに南へ振れる。内法は長さ2.02m、幅0.49mの長方形を呈する。擾乱により移動したものを含め計22枚の板石が確認され、石材は調査時の目視による確認では砂岩と考えられた。蓋石は5枚からなり、各蓋石の縦ぎ目上には板石が配置される。上部板石の中央部は擾乱により移動していたが、両端の2枚は良好に残っていた。構築時は4枚を整列させていたと考えられる。蓋石の縦ぎ目、蓋石と上部板石との隙間に粘土が充填される。蓋石と壁石との間にも粘土の充填が見られた。蓋石・壁石間の粘土はブロック状の34塊に分かれ、その上面には蓋石のスタンプ痕も明瞭であった。粘土塊を壁石上面に並べた後、蓋石を設置したと考えられた。

小口石は両側共に各1枚で構成されるが、西小口石の方が幅広である。小口石と長側石との組み方は小口石が長側石の外側に位置する。長側石は南長側石3枚、北長側石2枚で構成される。土圧によるものか内側に倒れ気味のものが多い。両長側石共に西小口から2枚目の東端部外面を加工し、1枚目と縦ぎ合わせている。また各縦ぎ目の外側には縦長基調の板石を片側4枚、計8枚を設置していた。南長側石東端に設置された外側板石は東小口まで至る。北長側石は両小口まで距離が足らず、外側板石が両小口石と接している。長側石と外側板石との隙間に粘土の充填が見られた。小口石、長側石、外側板石共に15~25cm程度の深さで霧島御池軽石層に突き刺さるように設置されていた。

棺床に底石はなく、霧島御池軽石層が露出しており、中央部が低く両小口石、両長側石に向かい高くなる。また西端部において7cm程度の盛り上がりが確認されており、頭骸骨の出土位置であることから枕状の施設と見られる。枕状施設、壁面と接する部分の高まり共に霧島御池軽石層の地山であったため、軽石を後から盛り上げたものではなく、小口石、長側石を設置した後、棺内を掘り下げ、造り出されたものと推測された。

棺内より人骨1体、堅櫛1点、鐵劍1点、ノミ状工具1点、刀子3点、貝釧3点、布製品が出土し、多量の赤色顔料の

塗布が確認された。人骨は西頭位で頭骸骨のみがほぼ完形を留めていた。頭骸骨には赤色顔料が付着し、堅物が装着されていた。なお人骨については熟年女性との所見が出ている。鉄劍は頭骸骨の南脇より切先を東に向け出土した。ノミ状工具は2つに折れており、南長側石に接する高まりに置かれた赤色顔料上にて刃部。鉄劍脳にてその柄部が出土した。刀子は頭骸骨の北側、北長側石に接する高まり上にて切先を東に向け重なり合うように出土した。貝釧は石棺のほぼ中央部にて3点が重なるように出土し、その位置より腕に装着された状態であったと考えられる。布製品は枕状施設上と頭骸骨と貝輪との中间付近にて小片が確認された。確認された布製品には現状で灰赤色と黒色を呈するものの2種があり、一部では灰赤色布製品の上に赤色顔料が乗り、その上に黒色布製品が重っている状況が見られた。赤色顔料は床面全体で検出されたが枕状施設、東小口周辺にて特に多量に観察される。また小口石、長側石壁面にも全面に渡る塗布が見られ、蓋石との間を塞ぐ粘土上面にても確認された。

(近沢)

遺物 51・鉄劍 残存状況は良好である。全長47.9cmを測り、劍身は切先からやや幅を広げつつ刃部間に至る。劍身に鍔はみられず両丸造りである。鍔は直角闊で、闊付近の身幅は3.05cmである。茎には目釘孔が一箇所存在する。茎はわずかに幅を減じながら直線的に茎尻に至り、茎尻は一字文字尻となる。鞘および把間、把締装具の一部が残存している。鞘と把間は木製、把締装具は鹿角製である。把間の先端は約1.7cmにわたり他の部分より細く加工されている。また、把締装具はその残存状況から、把間の加工部分を覆っていたと推定できる。すなわち、把締装具はソケット状に加工され、そこへ把間の先端を差し込んだとみられる。

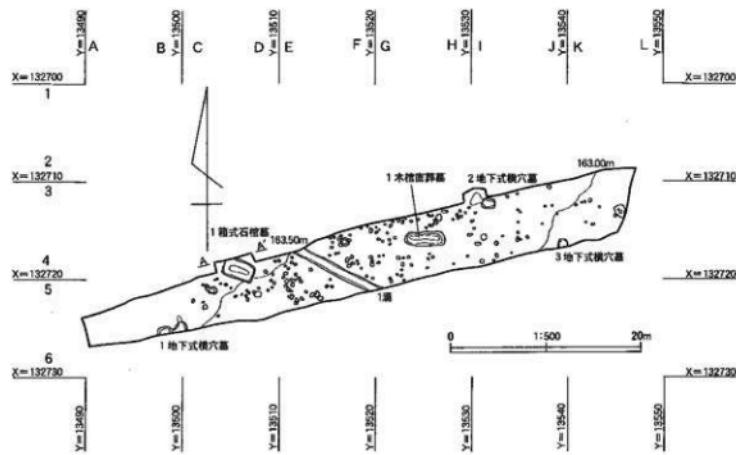


図34 平成16年度調査区・遺構分布図

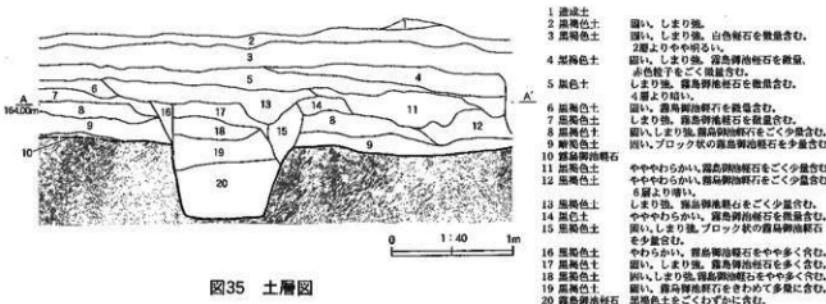


図35 土層図

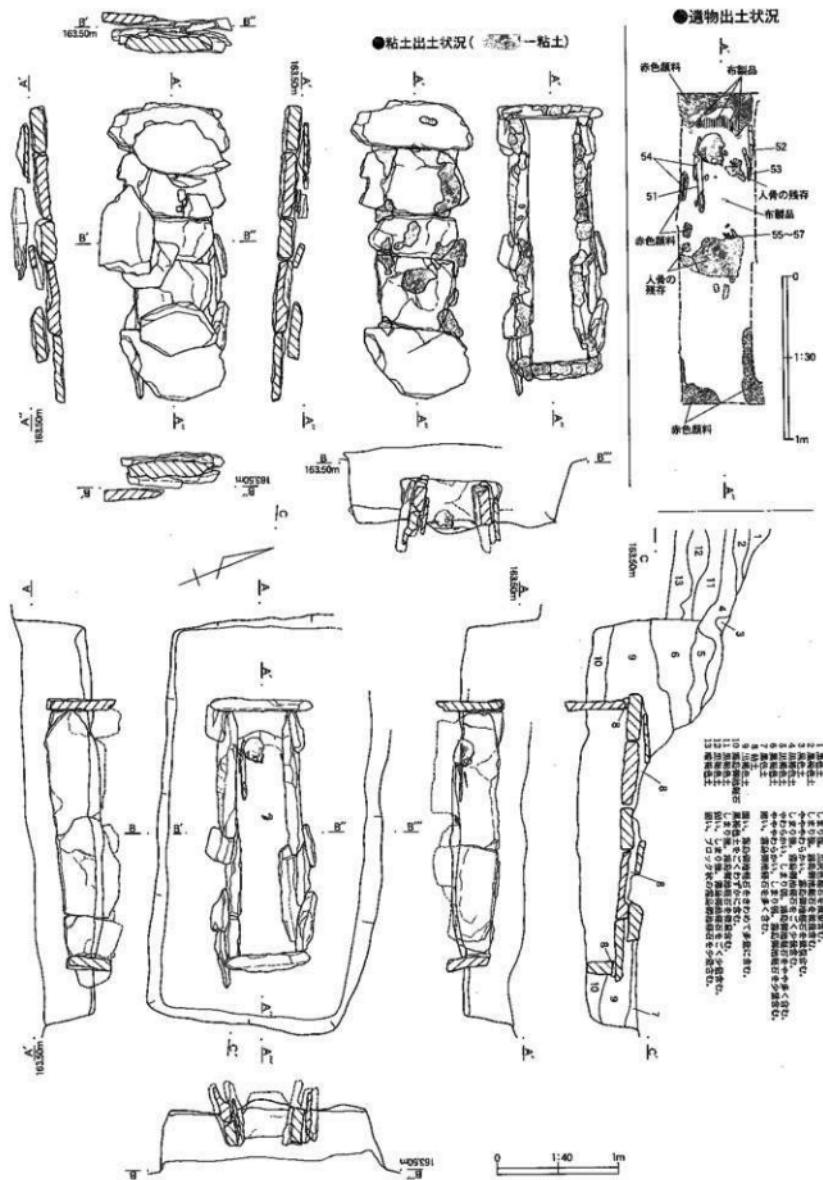


図36 1号箱式石棺墓実測図

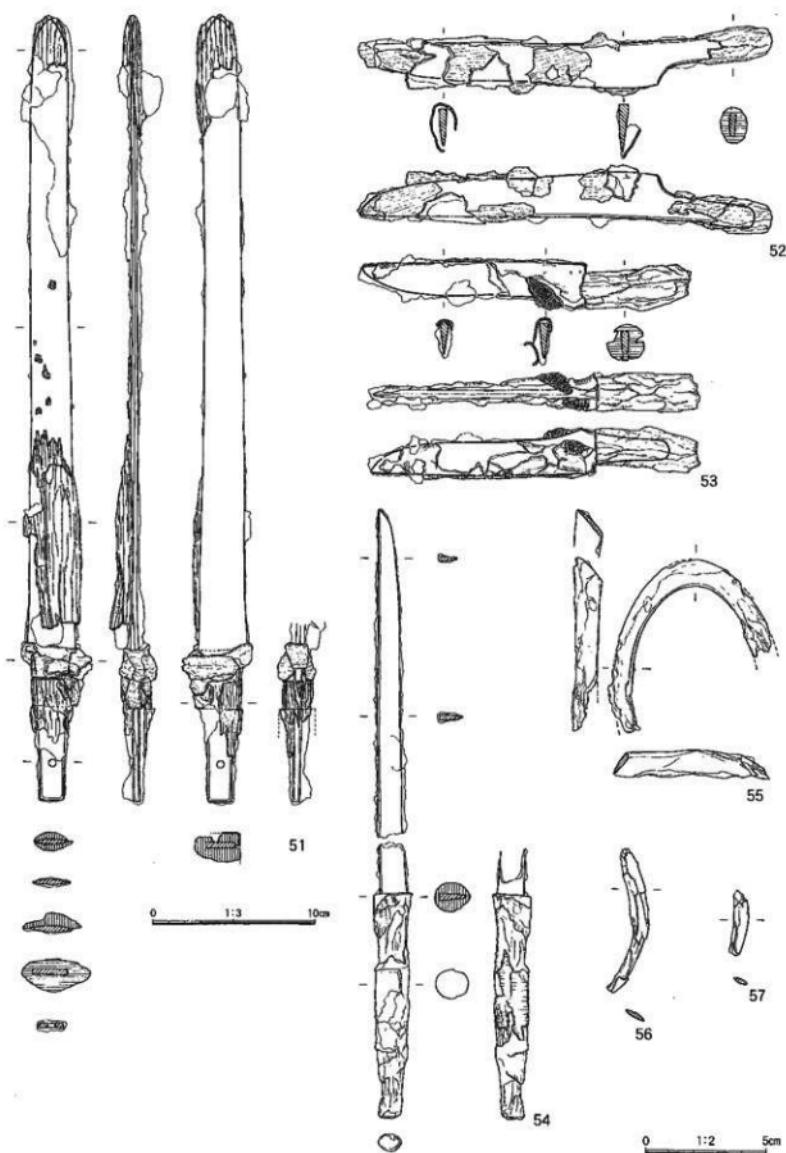


图37 1号箱式石棺墓出土遗物实测图

52・刀子 残存状況は良好で、錆による変形・欠損はほとんどない。全長16.3cmを測り、背側の外形線が緩やかに反りをもつ。関はナデ関で、関付近の刃部幅は1.8cmである。茎は茎元からほとんど幅をえずに茎尻に至り、茎尻は栗尻となる。刃部の多くの部分には革が付着し、革製の鞘に納められていたと考えられる。柄は鹿角製である。

53・刀子 残存状況は不良で、やや層状剥離が進行している。全長12.3cmを測り、刃側の外形線は、切先からふくらを有したち緩やかに幅を広げながら刃部間に至る。関は両関で背側が直角関で、刃側がナデ関である。関付近の幅は1.75cmである。茎は茎元からほぼ幅を変えずに茎尻に至り、茎尻は栗尻となる。刃部両面には布が付着している。布は平織りで、糸の太さ0.6mm、織幅は絹糸1.8mm、綿糸1.8mmである。柄は鹿角製である。

54・ノミ状工具 残存状況は良好であるが、二つに折れており両者は現状では接合しない。柄は鹿角製で、一部に糸巻きの痕跡が認められる。現存長は24.7cmで、刃部は間に至るまで幅約1.1cmと非常に細い。関の形状、並びに茎尻の形状は不明である。

55~57・貝釧 3点出土しているが、いずれも破片で同一個体の可能性がある。最も状態が良い資料の観察から、オオツタノハ型の貝釧とみられる。
(藤井)

1号木棺直葬墓（図38・39）

遺構 調査区中央G・H-4グリッドにて検出された。主軸は東一西である。

墓壙の検出面は8層上面である。検出面での平面形は長さ4.24m、幅1.23mの隅丸長方形であるが、各コーナーの角度は緩く梢円形に近い。検出面から0.5~0.7mの深さで平坦面を形成し、その北側に長軸と平行した深さ15cm程度の二段目の掘り込みをもつ。一段目の底面南側からは一部に凹凸の見られる硬化面が検出された。壁面は外傾しながらやや緩やかな角度で立ち上がる。墓壙二段目は長さ3.35m、幅0.69mを測るが、南側長辺が北側に比べ長く、台形様の平面形を呈する。西下半より四状のカーブを描く硬化面が検出され、東側より2枚、西側にて1枚の板石を用いた立石が出土した。四状のカーブを描く硬化面の存在より舟形木棺の使用が想定され、東西に設置された立石はその小口に位置していると考えられた。一段目南側にて検出された硬化面はその位置関係により、埋葬時に踏みしめられて形成された作業面と推測される。また東側2枚の板石のうち、内側の板石Bは斜めに倒れた状態で出土しており、当初から斜めに設置されたものとも捉えられるが、埋葬時、木棺上に水平方向に置かれていたものが、木棺腐食による陥没に伴い内側へ落ち込んだ状態である可能性もある。前者の場合木棺の最大長は2.7m、後者の場合2.45mとなる。また板石Bと板石Cとは重なるように接合しており、一枚の石材を二分割し使用した状況がうかがえた。石材は調査時の目視による確認では砂岩と考えられた。

墓壙二段目内より鉄剣1点、刀子1点、鐵鎌2点、豎櫛5点が出土し、赤色顔料の塗布が確認された。鉄剣、刀子、豎櫛は東側板石付近にて確認された。中央の豎櫛が頭位置と考えられ、鉄剣は切先を西に向けるその南脇、刀子は切先を東に向ける北脇に配置される。鐵鎌は中央から西側にかけて切先を東に向ける状態で出土している。赤色顔料は豎櫛のやや西側と鉄鎌西側にて検出された。
(近沢)

遺物 58・鉄剣 残存状況は良好である。全長45.5cmを測り、劍身は切先からやや幅を広げつつ刃部間に至る。劍身に鱗はみられず、両丸造りである。関は直角関で、関付近の身幅は2.9cmである。茎には目釘孔が1箇所存在する。茎はわずかに幅を減じながら直線的に茎尻に至り、茎尻は一字尻となる。有機質も良好に残存し、把頭の一部および把頭・把縁装具・鞘が残存している。把頭は木製であるが、形状・大きさは腐食が進行し明確でない。把間は木製で、太さ約2mmの巻紐が良好な状態で遺存している。巻紐の欠損部の観察より、紐の断面には二つの空洞が認められ、外側織維と2本の内側織維からなる2重構造の巻紐であることがわかる。柄間の先端はX線写真の観察より把縁装具に差し込まれていることがわかる。把縁装具は鹿角製であるが、本来の形状は復元困難である。鞘は木製の2枚合わせである。腐食が進み表面の付着物の有無は確認できない。なお、鞘口と把縁装具との間には5mmほどの空白部が存在する。

59・圭頭鎌 茎が欠損しているが残存状況は非常に良く、鎌身部には布が付着している。布は糸の太さ0.5~0.6mm、織幅は絹糸1mm、綿糸1mmである。現存長は11.9cmで、鎌身部両面には線状の刻印が施される。

60・圭頭鎌 全体が錆に覆われるが、X線写真により外形線が確認できる。片面には布の痕跡が認められ、もう一方の面には木質が付着する。布は糸の太さ0.6mm、織幅は絹糸1mm、綿糸1mmである。木質は木棺棺床が接着しているものとみられる。

61・刀子 錆化が進行している。現存長は12cmで、刃部は切先からふくらを有し刃部半ばまでやや直線的であるが、

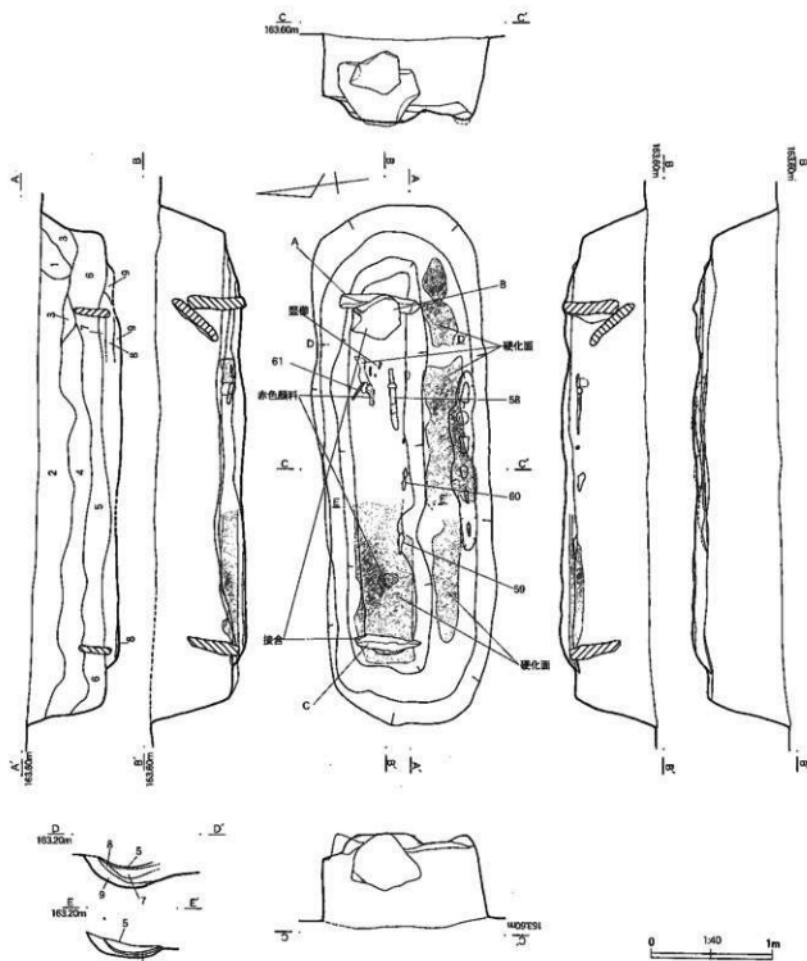


図38 1号木棺直葬墓実測図

1 黒色土 やややわらかい。蘭島御持石を数点含む。
2 黒褐色土 固い。しまり強。
3 黑褐色土 やややわらかい。
4 黑褐色土 やややわらかい。
5 黑褐色土 やややわらかい。しまり強。
6 黑褐色土 固い。しまり強。5層より蘭島御持石を多く含む。
7 黑褐色土 やわらかい。しまり強。蘭島御持石を多く含む。硬化面。
8 黑褐色土 やわらかい。しまり強。蘭島御持石を多く含む。
9 黑褐色土 やややわらかい。しまり強。蘭島御持石を多く含む。
10 黑褐色土 やややわらかい。しまり強。蘭島御持石を少く含む。

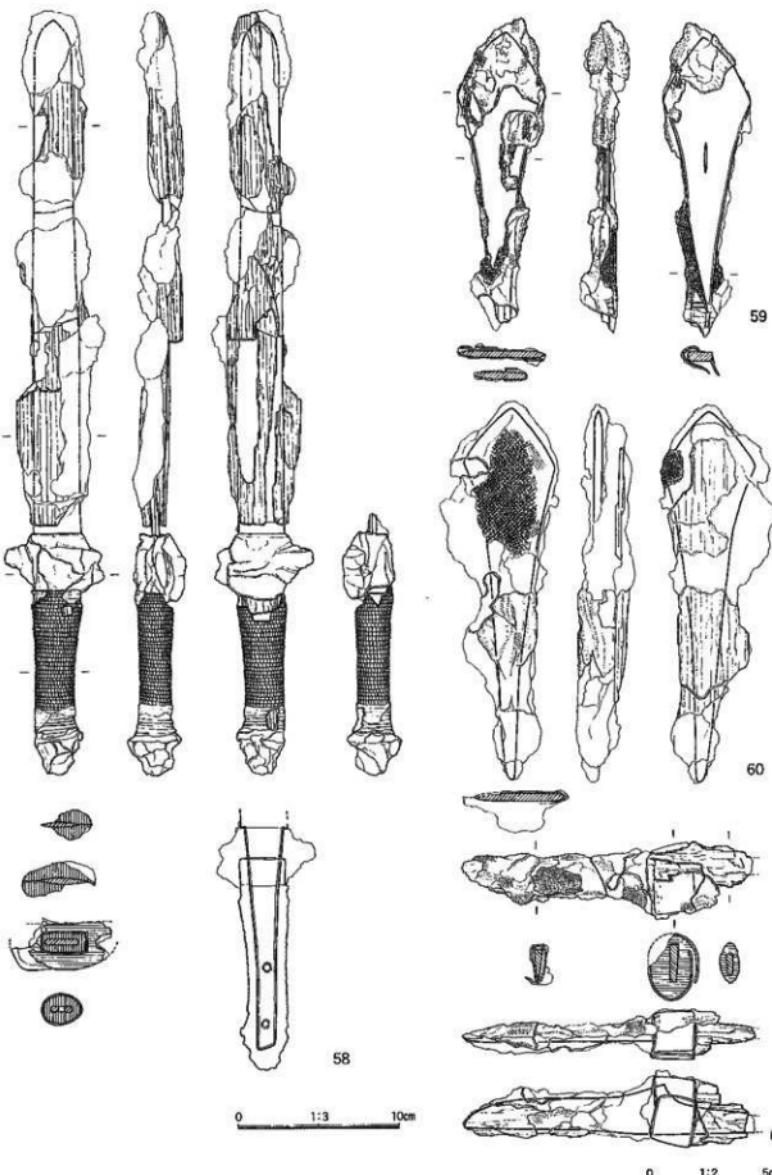


图39 1号木棺直葬墓出土遗物实测图

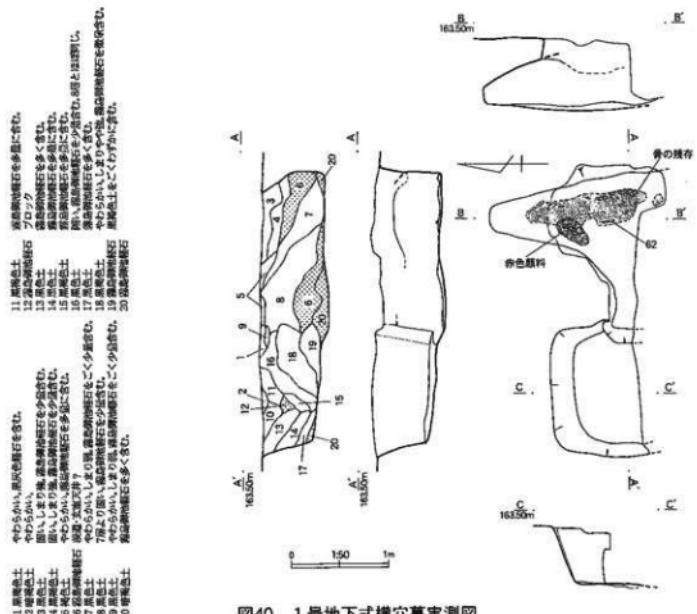


図40 1号地下式横穴墓実測図

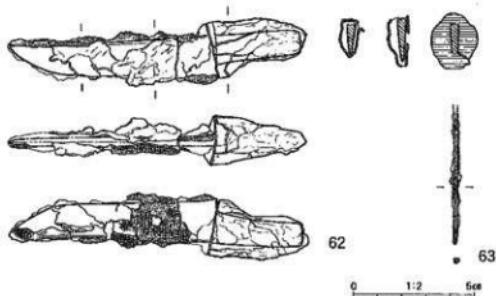


図41 1号地下式横穴墓出土遺物実測図

大きさを計測できるのは2個体で、幅1.4cm・高さ1.2cmと幅1.7cm・高さ1.6cmである。他の個体も同様の大きさの小型堅櫛（藤井）

1号地下式横穴墓（図40・41）

遺構 調査区東端B・C-5・6グリッドで検出された。玄室から羨道にかけて崩落し、南側は既存道路により破壊されていた。3～9層は玄室・羨道崩落に伴う流入土、10～18層は堅坑埋土である。堆積状況の観察から羨道天井が崩落し土砂が流入した後、玄室天井が崩落したと捉えられた。

地下式横穴墓の主軸は東である。堅坑平面形は長さ1.38m、現存幅0.9mを測り、正方形もしくは長方形と考えられる。

その後幅を広げつつ刃部間に至る。関はナデ関で、関付近の身幅は2cmである。茎は茎元より幅を狭めながら茎尻に至る。茎尻の形状は不明である。主頭櫛と同様に片面に布の痕跡があり、もう一方の面には木質が付着する。布は平織りで糸の太さ0.6mm、織幅は経糸1mm、緯糸1mmである。木質は木棺棺床に由来する可能性がある。当遺跡出土刀子の中で、本例のみが縄を有し、鉄製とみられる。

堅櫛 5個体の存在が確認できるが、残存状況はいずれも不良である。櫛歯はいずれも残存せず、ムネ部が残る。ムネ部の大

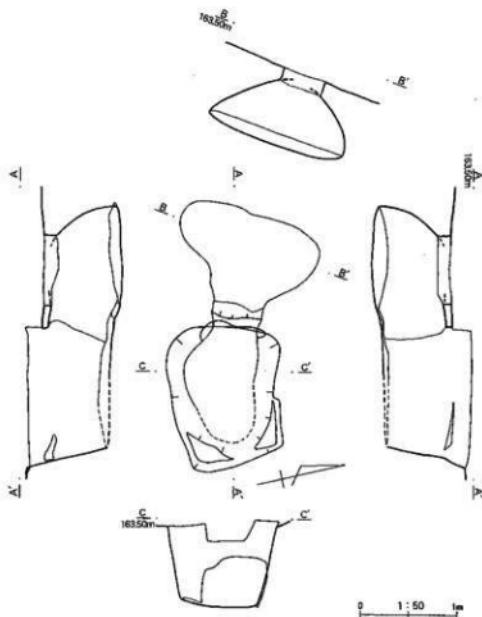


図42 2号地下式横穴墓実測図

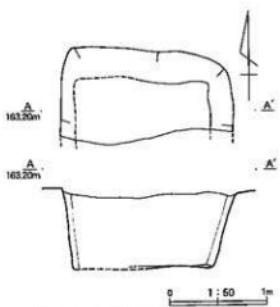


図43 3号地下式横穴墓実測図

検出面からの深さは0.65m、床面は平坦で、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。埋土は霧島御池軽石と黒色土が混合された土が瓦層状に積み重なる。狭門部分にて床面が10cm程度下がる。土層堆積に閉塞施設の痕跡が認められない点より、木材を使用した板閉塞かと考えられたが、霧島御池軽石を主体とする層(19層)の上に黒褐色土層(18層)を重ねた層が閉塞土であった可能性もある。義道は玄室に向かい開く。床面は玄室に至って若干高くなる。玄室は奥行0.78m、現存幅1.83mを測り、平入り長方形の平面形と考えられるが、左側壁の幅が狭く先細り状となる。床面は中央部が低く、左側壁に向かい高くなる。壁面はやや外傾しながら立ち上がり、左側壁では15cmの高さで内側へと折れる。天井はわずかに丸みを帯びる。

床面のほぼ中央より人骨の残存と考えられるベースト状の有機質が検出され、その西側に赤色顔料、刀子1点が確認された。有機質の状況より南頭位と推測される。赤色顔料は一部が塊状となり朱玉の可能性がある。また出土位置を特定できなかったが針1点も出土している。

(近沢)

遺物 62・刀子 残存状況は比較的良好である。全長は12cmで、刃部は切先からふくらを有し、幅を広げずに刃部間に至る。関は直角関で、關付近の身幅は1.8cmである。茎は茎元からはぼ同じ幅で茎尻に至り、茎尻は楕丸・一字文尻となる。刃部の一部に布の痕跡が観察できる。布は平織りで糸の太さ0.4~0.6mm、縫幅は経糸1.4mm、緯糸1.4mmである。柄は直角製であるが劣化が進行している。

63・針 上部が欠損し、針穴は確認できない。残存長5.4cm、太さ1.85mm、断面は楕丸形を呈する。なお、鎌に覆われているが糸が緩やかに巻きつけられているのが確認できる。

(藤井)

2号地下式横穴墓 (図42)

遺構 調査区のはば中央北端H-I-3グリッドで検出された。地下

式横穴墓の主軸は西である。検出面は8層である。

堅坑平面形は長さ1.45m、幅1.12mの隅丸長方形を呈し、狭門側コーナーの角度は緩い。検出面からの深さは0.9m、床面は平坦と考えられるが東側部分は調査時に掘り過ぎておりはっきりとはしない。壁面は若干外傾しながら立ち上がる。東側両コーナーにはステップ状の段が検出された。層位的には黒色土層直下にあたり、霧島御池軽石層の上面の固くしまる部分にあたる。理土は上位より霧島御池軽石を少量含むしまりのよい黒色土層、霧島御池軽石層、霧島御池軽

石を多く含む黒褐色土層の3層に大きく分層された。墓門は竪坑西壁北より構築される。立面形は隅丸方形を呈する。閉塞施設は確認されていない。墓道は墓門付近にて最小幅を測り、その幅を広げつつ玄室へと至る。床面はその半ばで一段下がる。玄室は竪坑軸よりも約20°北へ振れる。玄室内には黒色土が充満していた。平面形は奥行0.71~0.81m、幅1.46mの平入り横長楕円形を呈する。床面は奥壁、両側壁に向かい除々に高くなり、壁面は内湾しながら立ち上がる。ドーム状の立面形と考えられる。

(近沢)

3号地下式横穴墓（図43）

遺構 調査区の東端J-4グリッドで検出された。既存道路により大きく破壊された形の方形土塗である。地下式横穴墓の竪坑部と考えられた。現存長1.8m、現存幅1.0m、検出面からの深さ0.85mを測る。床面は平坦と見られ、壁面は若干外傾しながら立ち上がる。埋土は霧島御池輕石に少量の黒色土を含む層が主体となっていた。

(近沢)

III その他の遺構

1号溝状遺構（図44）

遺構 調査区中位E-F-4-5グリッドにて検出された。北西-南東方向に9mの長さが確認され、両端共に調査区外へと拡大すると考えられる。幅は0.9~1.1m、検出面からの深さは約30cmを測り、広いU字状の立面形を呈する。底面には硬化面が確認され道路としての使用が考えられた。遺物は出土していない。

(近沢)



図44 1号溝状遺構実測図

表13 箱式石棺墓計測値一覧

主軸	墓室(m)			石材部(枚)						小口・長脚石 組み方	長脚石 組み方	回復 粘土	赤色 粘土	人骨	備考	
	長さ	幅	深さ	小口幅	長さ	蓋石	小口石	長脚石	底石							
I N69°-W	3.32	1.42	0.52	東 0.49	2.02	5	東 1 西 1	北 3 南 3	-	2 (4)	-	北 4 西 4	且空型 直ねぎぎ	○ ○	1 鐵錠1-鉄錠1-刀子2-ノミ 鉄工具1-鉄錠3-布製品	
	[1.08]	[0.49]														

表14 木棺直葬墓計測値一覧

主軸	墓壙・一段目					墓壙・二段目					木棺	赤色 粘土	人骨	備考	
	後山面	右側	左側	高さ(m)	幅(m)	上面 長さ(m)	幅(m)	底面 長さ(m)	幅(m)	高さ(m)					
I S43°-W	4.24	1.23	3.81	1.23	0.5-0.7	3.35	0.69	3.06	0.45	0.15	2.45-2.7	○	-	鉄錠1-刀子1-鐵錠5	

表15 地下式横穴墓計測値一覧

主軸	玄室			唐泥			竪坑・底面			竪坑・玄室			閉塞	人骨	赤色 粘土	備考
	奥行(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	底面 高さ(m)	底面 幅(m)	底面 高さ(m)	底面 幅(m)			
I N90°-E	0.78	(1.83)	(0.52)	0.75	(0.31)	-	1.38	(0.90)	(0.65)	1.12	(0.67)	高褐色土?	残片	○	刃物1-鉄錠1-朱衣?	
2 N77°-W	0.71-0.81	1.46	(0.64)	0.49-0.80	0.45-0.60	0.70	1.45	1.12	(0.90)	(1.11)	0.74	板?	-	-	-	
3 -	-	-	-	-	-	-	1.80	(1.00)	(0.85)	(0.89)	(0.70)	-	-	-	-	

表16 溝状遺構計測値一覧

主軸	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	下幅(m)	深さ(m)	備考
I N63°-W	(9.0)	0.9~1.1	0.6	0.3	発掘面	

表17 鉄劍計測値一覧

造構名	残存長 (cm)	全長 (cm)	刃部(cm)				縦 開	基部(cm)					鉄の枝法 面としみ 所としみ	
			刀部長	造り	底面	最大幅		茎部長	断面	茎元幅	茎尻幅	茎尻	目釘孔	
S1 1石削	47.9	47.9	39	四丸	0.5	3.05	○ 直角	9	長方形	2.3	1.5	一文字	1	0.45×0.45
S2 1木挽	46.7	45.5	32	四丸	(0.5)	2.9	○ 直角	13.5	長方形	2.4	1.1	一文字	1	(D0.35×0.35)×(0.4×0.4)

表18 刀子・ノミ状工具計測値一覧

造構名	残存長 (cm)	全長 (cm)	刃部(cm)				縦 開	基部(cm)				鉄	
			刀部長	最大幅	地大厚	開		者機質の有無	茎部長	茎元幅	茎尻幅	茎尻	
S2 14石削	17.0	16.3	12.2	1.8	0.42	-	片・ナデ	革・両面	×	4.1	-	0.6	朱
S3 1石削	13.6	12.3	8.7	1.75	-	-	片・ナデ・直	布・両面	×	3.1	1.3	0.8	黒
S4 1石削	24.7	(25.0)	14.6(15.8)	1.1	0.3	-	無	×	-	-	-	-	直角
S1 1木挽	12.0	-	8.3	2	-	-	片・ナデ	革・両面	○	-	-	-	本
S2 地下式	12.2	12.0	3.6	1.8	(0.4)	片・直	布・両面	×	3.6	1.2	0.9	調丸・一文字	直角

表19 鉄鍔計測値一覧

造構名	残存長 (cm)	全長 (cm)	刃部(cm)				縦 開	基部(cm)				鉄部(cm)	有機質の有無
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	断面		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	断面	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	
S9 1木挽	11.9	-	(10.8)	2.6	3.6	0.315	平造り	(8.2)	4.0	長方形	-	-	○
S0 1木挽	15.5	15.0	12.3	2.3	3.7	-	平造り?	-	-	-	-	-	○

7まとめ

牧ノ原遺跡群は都城盆地北縁に位置し、南に盆地を一望するシラス台地上に立地する。周辺には大淀川にそって古墳群・地下式横穴墓群が散在しており、盆地内における集中域となっている。今回の調査では古墳時代・中世を中心とした遺構・遺物が確認された。

古墳時代

遺構は平成15・16年度を合わせ箱式石棺墓3基、木棺直葬墓1基、地下式横穴墓15基、土壙墓3基、溝状遺構1条、が検出され、遺物は鉄劍、刀子、鐵鎌、鐵鉗、鍔鐙先、玉類、土師器が出土した。遺物に関しては横本達也・藤井大祐両氏より詳細な分析を頂いた。遺物からみた年代観としては古墳時代中期中葉にあたり、遺構により若干の幅はあるものの、遺跡の総体的年代としてはその前後の時期に納まるとされる。

箱式石棺墓 平成15年度2基、平成16年度1基が検出された。過去例を含めると総計7基となる。小口構造が残るものに関してはいずれもⅡ字形で、長側石は複数枚により構成される。だが1号（平成16年度）では長側石に横長基調の長大な石材を使用し、加工痕が明瞭である点や、無底石である点、質・量共に突出した遺物など、本遺跡群において異質である。

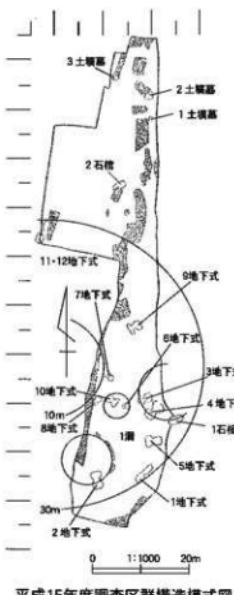
木棺直葬墓 平成16年度調査にて検出された。本遺跡群内にて初例である。木棺は墓壙の状況より舟形木棺と考えられ、小口両端に立石をもつ。類例について察聞にして不明とせざるを得ないが、屍床長軸両端に板石を立てる鹿児島県吾平町掘木田原地下式横穴墓は立石配置に関しては類似する。

地下式横穴墓 平成15年度12基、平成16年度3基が検出された。過去例を含めると総計16基となる。まず全体的に共通する様相としては、1号（昭和43年）を除き「浅い深度」・「不整な構造」が指摘できる。次に玄室規模では絶じて床面積2m²前後であるが、6・7・8号（平成15年度）は1m²前後と小さい。このような小型地下式横穴墓は幼少児理葬もしくは改葬墓の可能性が想定されている。玄室平面形は平入り両袖長方形（2～6・9号：平成15年度・1号：平成16年度）が主体となり、同梢円形（7号：平成15年度・2号：平成16年度）、同三角形（10号：平成15年度）、妻入り右片袖長方形（1号：平成15年度）が確認される。閉塞施設の確認は狭門での霧島御池輕石塊（4号：平成15年度）のみであり、それ以外は木材あるいは土塊使用かと考えられた。

壁杭は方形基調のものが主となるが、横長長方形（9号：平成15年度）、狭門へ向かい床面が下がるもの（11号：平成15年度）など特徴的な形態もみられる。遺物は少なく、無遺物のものが大半を占め、多くても1・2種類に留まる。そのため現状においては個々の時期の明示は困難であり、遺跡の総体的時期である中期中葉前後との把握が基本的視点となる。だが妻入り型玄室は後出する要素と指摘されており、当地下式横穴墓群内でも相対的に新しく位置付けられると考えられる。

群構造 地下式横穴墓群には環状・求心的分布を示す群構造が内在し、数基の地下式横穴墓による墳丘の共有が指摘されている。平成15年度調査区にて群構造を検討したものが左図である。直径約30mの外環と直径10mの内環との間に主要な遺構は納まり、3・4号地下式横穴墓・1号箱式石棺墓、6・10号地下式横穴墓による小環が形成され、2号地下式横穴墓と1号溝状遺構との組合せからも小環が形成される。だがこれらは限られた調査区内での図上の検証結果であり、一つの可能性に過ぎない。しかし3・4号地下式横穴墓・1号箱式石棺墓による小環の形成は、地下式横穴墓と箱式石棺墓が墳丘を共有する同一規制内に成立していた可能性を示唆するものとして注目すべき結果といえる。

まとめ 今回の調査成果としては、①箱式石棺墓群における構造・副葬品からみた差異の存在、②木棺直葬墓の出土、③箱式石棺墓・地下式横穴墓群が古墳時代中期中葉を中心とすることの確認、④箱式石棺墓・地下式横穴墓が同一規制内に存



平成15年度調査区群構造模式図

在した可能性の想定が上げられる。また過去例を含めた牧ノ原遺跡群（古墳群）の内訳としては前方後円墳3基、円墳14基、箱式石棺墓7基、木棺直葬墓1基、土壙墓4基、地下式横穴墓16基となった。これらの点より、牧ノ原古墳群の位置付けとしては南九州内陸部にあって、古墳時代中期前葉をその初源とする、多様な墓制が展開する古墳群としての把握が現状での基礎的認識になると考えられる。

中世

平成15年度調査区より掘建柱建物跡15棟、溝状造構1条、土壙4基が確認され、遺物は舶載・国産陶磁器、土師器などが出土した。

遺物 時期としては包含層出土龍泉窯系青磁碗（25）が碗II-b類（13世紀前後～前半代）と最も古いが一点のみである。7号土壙出土龍泉窯系青磁折縁盤口盤部片（23）は博多駅・築港線3次調査IV面10号溝出土例より14～15世紀代と考えられる。国産陶磁器では2号溝状造構出土備前焼櫻鉢（24）がIV期（14世紀末～16世紀初め）に相当する。最も多く出土した土師器の大部分は衆煙光博編年案による都之城主郭200土坑出土例（15世紀中頃）の特徴に類似している。この状況より15世紀代を中心としたものと捉えられた。

掘建柱建物跡 調査区中央に集中し15棟が確認された。構造は3間×1間、3間×2間が主体となり、規模的には一面庇をもつ1号掘建柱建物跡が最も大きく（54m²）、それ以外はA類（面積29～32m²）、B類（面積21～24m²）に大別される。集中する建物群の大半が重複し、床面積から見た場合、併存可能な棟数は1～3棟と考えられる。そのため複数回にわたる建替えが想定されるが、個々の時期や変遷などは明確にはできなかった。

溝状造構 建物群の南側に位置し、現状ではこれを越える建物跡が検出されていない点より、建物群と関連する境界溝と考えられた。

まとめ 都城市域での中世掘建柱建物は3間×2間（床面積15～27m²）の割合が最も高く、普遍的農民層のものと想定されている。今回確認された建物群はこれと比較し若干大きなものが多い点は指摘でき、少量ではあるが青磁、火鉢、墨書き土器の出土もあり、普遍的な農民階層より上位階層の居住であった可能性も考えられた。また建物群の集中については、東に古墳、西を谷に接する地形的制約が主因と捉えられるが、西500mにある高城城址の存在もその背景として考慮する必要があるかと考えられる。

今回の一連の調査では古墳時代中期における多様な墓制の展開、中世における建物群の存在を捉えることができた。だが前後円墳を含めた古墳群全体の群構造や個々の地下式横穴墓における変化の様相、また中世建物跡群の時期差の検証や文献資料も含めた高城城址との関係など踏み込めなかった問題も多く残る。今後の課題とした。

最後になりましたが、調査・整理・報告書作成にあたり多くの諸氏、諸機関より御指導、御支援をいただきました。特に橋本達也氏、矢部喜多夫氏には多大な御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
(近沢)

【参考文献】

- 宮崎県教育委員会1969「高城町牧ノ原遺跡調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第14号
岩水哲夫1988「地下式横穴墓にみる小型形式のあり方について」『宮崎考古』第10号
吉原秀敏1989「九州の削竹形木棺」『古文化講叢』第20巻(中)
宮崎県1993「高城牧ノ原古墳群」『宮崎県史 資料編 古考2』
内藤一郎1996「川内市における古墳時代墳墓について」『大河』第6号
中野和浩1998「地下式横穴墓の葬構造」『宮崎考古』第14号
清家孝2001「畿内周辺における箱形石棺の形式と集團」『古代学研究』152号
和田理恵2001「日向の地下式横穴式石室」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会
九州前方後円墳研究会2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓－資料編－」
橋本達也2003「副葬軌跡からみる古墳時代の南九州」『前方後円墳整造周辺における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会
平田博幸2003「古墳時代箱形石棺事情」『統文化財学論集』第二分冊
西都市教育委員会2003「立ヶ島第2遺跡」
延岡市教育委員会2004「野地古墳」『平成15年度 市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
橋本達也・藤井大祐2005「小考－高取原地地下式横穴墓出土鐵鏡の意義」『高取原地下式横穴墓』延岡市教育委員会
福岡市教育委員会1989「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅲ)博多」
太宰府市教育委員会2000「太宰府条坊跡XV－陶器器分類編－」
業様光博2004「那珂盆地における中世土師器の断年に關する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号
外山勝之・原田範泰子2004「都城市における中世掘建柱建物跡の類型化」『宮崎考古』第19号
伊藤晃典2004「中世陶器の物流－備前焼を中心にして－」日本考古学協会2004年度広島大会研究会発表資料

付編1 牧ノ原遺跡群出土鉄製品の意義

鹿児島大学総合博物館 橋本達也

(1) はじめに

牧ノ原遺跡の古墳時代墓群では、1造構ごとの出土点数は多くないが、全体としては良好な鉄製品が出土した。地下式横穴墓をはじめ各墓では鉄製品が主要副葬品であり、むしろほかには出土品がないことが一般的であることから、ここではこれらの鉄製品資料の年代的な位置づけおよび性格について簡潔にまとめておきたい。

(2) 副葬品の年代について

2号土壙墓（2003年度）出土方形板鍔鋒先　ここで年代的な位置がもっとも明確な資料である。この資料は古墳時代中期中葉以前にさかのぼるものである。雖分は難しく古墳時代前期以降～中期中葉とせざるを得ないが、少なくとも中期後半以降に下るものではないことはまず確認できる。

1号木棺墓（2004年度）出土鉄鎌・鉄劍・堅櫛　鉄鎌は宮崎県西諸県地域を中心に分布する大型主頭鎌であるが、刃部が比較的短く、刻印をもつ鉄鎌は当該地域では長頭鎌には伴わず短頭鎌などと共に伴する。古墳時代中期前葉～中葉に位置づけられる。

同じく1号木棺の鉄劍は柄頭・柄縁装具の状態が悪いために明確ではないが、現状でみると有段有突起B2類である可能性が高い。これは古墳時代中期中葉～後期前葉までの間に位置づけられる。

堅櫛は形態的な変化はみられないが、古墳時代前期から中期に存在し、とくにその盛行期は中期である。後期には基本的に存在しないことから、鉄鎌・鉄劍の年代的な位置づけと矛盾しない。1号木棺墓は古墳時代中期中葉に位置づけられる。

1号土壙墓（2003年度）出土鉄鎌　幅広の劍身形をなし、また闘の形状も明瞭である。鉄鎌としては古相の形態を示している。緻密な変遷觀ではないが、少なくとも古墳時代中期前葉～中葉に位置づけられよう。老司古墳3号石室に比較的の形態の類似する資料があり、近い年代すなわち中期前葉に位置づけられる可能性が考えられる。

9号地下式横穴墓（2003年度）出土鉄劍　劍に関しては明確な位置付けの難しいものが多いが、これは茎が細く長いことを特徴としている。細長茎グループに位置づけられ、中期前半までに位置づけられるものとみなされよう。

牧ノ原古墳時代墓群の年代的な位置

以上の資料を総括してみると、いずれの資料も古墳時代中期前葉～中葉にかけて多くの時間的な接点をもつことがわかる。それぞれが異なる造構から出土しているため、もちろん一定の時間幅を認める必要はあるが、年代的な位置づけが判明している資料からみるとこの墓域は古墳時代中期中葉を中心としてその前後の時期に営まれたとみなしてよい。

そもそも本遺跡の墓群は副葬品が少なく、その上に古墳出土遺物では比較的年代的な位置づけが容易な鉄鎌が限られる。一方で、明確な位置づけの困難な鉄劍や刀子が出土遺物の主体を占めるために、すべての造構の年代を求めるることはできないが、古墳時代後期にまで明らかに下るような遺物の存在もなく、上記の年代観に矛盾する資料は存在しない。

(3) 副葬品の性格について

鉢　1号土壙墓（2003年度）では鉄鎌が出土した。一般に鉄鎌は朝鮮半島系の武器であり、威信財的性格をもった副葬品として豊富な副葬品を伴う有力古墳に副葬されていることが多い。少なくとも、九州南部では広域交流の中で入手された稀少品である。

この土壙墓は地下式横穴墓では鉄鎌が副葬される事例が確認されているが、それにしても小規模な墓からの出土には違和感のある資料である。その入手には近在する古墳の被葬者である有力首長層がかわり、2次的な配布がなされた可能性を考えるのが妥当であろう。

副葬品と性別　地下式横穴墓では女性にも鉄鎌が副葬される事例が確認されているが、一般に古墳では鉄鎌は男性に伴う副葬品である。今回の報告資料では1号木棺墓（2004年度）のみで鉄鎌が確認されている。1号木棺墓は有段有突起B2類の可能性が高い鉄劍をもち、副葬品において武器が主体的な位置を占めている。これらのことからすれば1号木棺墓の被葬者は男性である可能性が考えられる。またこの埋葬施設は地下式横穴墓ではなく、他地域との交流を背景に成立したと考えられる。一方で、1号石棺墓（2004年度）は1号木棺墓と同様にこの墓群中では比較的副葬品が多いにもかかわらず、鉄鎌を伴っていない。被葬者が女性であることが背景にある可能性が考えられよう。ところで、今回の調査で確認されたもう1基の石棺墓、1号石棺墓（2003年度）も被葬者が女性であることは、この墓群において石棺墓と女

性という墓制と性別に相關関係を認めうる可能性がある。

ほか、すべてに適用できるわけではないが、針は女性に伴うことが顯著な資料である。人骨は出土していないが1号地下式横穴墓（2004年度）には女性が葬られている可能性が考えられる。

副葬品と被葬者像 牧ノ原の古墳時代墓群では鉄剣と刀子の出土が多い。とくに刀子が目立ち、2号地下式横穴墓（2003年度）では刀子のみ、1号地下式横穴墓（2003年度）では刀子と剣、1号地下式横穴墓（2004年度）では刀子と針しか出土していない。あるいは副葬品の確認できなかった地下式横穴墓も多い。

今回の報告中では2004年度の1号石棺墓と1号木棺墓がわずかながら、他よりも多くの副葬品がみられる。とくに1号木棺墓の鉄剣は有段有突起B2類の可能性が高く、広域交流が想定できる威信財的存在である。また、同じく1号石棺墓の鉄剣も鹿角装であることからすれば同様に位置づけられる可能性がある。両者が近接した被葬者は木棺墓が男性、石棺墓が女性であるとみられることは、近しい関係を想起させ、この墓群中では上位階層に属した近親者等とみなしうる可能性がある。また、これらの埋葬施設はともに都城盆地周辺では一般的ではなく、他地域からの移住者である可能性もある。

今回の調査成果から考えると、(1) 複数種の副葬品をもつ2004年度の1号石棺・1号木棺、(2) 鉄剣および刀子を中心として1~2種の副葬品をもつ地下式横穴墓・土塙墓、(3) 副葬品をもたない地下式横穴墓・土塙墓といった3つの区分が可能である。

おおむね階層的な上下関係を表しているとみられよう。とくに、副葬品で上位に位置づけられるものが地下式横穴墓でないことも埋葬形態と階層性の相關関係を示している可能性がある。ただし、同じ墓域内にあることからすれば同一集団内での上下はあっても一集団を越えるような明確な差とは捉えられない。また、地下式横穴墓は副葬品の有無にかかわらず、いずれも掘り込み深度が浅く小型墓である。

一方で、近隣には近接する時期に高取原地下式横穴墓のように多量の鉄器を中心とする副葬品をもち深く掘り込む大型の地下式横穴墓が確認されており、むしろこれとの差の方が明瞭である。また、牧ノ原古墳群は前方後円墳3基を含む都城盆地最大の古墳群であり、これら古墳被葬者との間に明確な差が存在したと考えられる。牧ノ原古墳群の前方後円墳などに関しては、資料がなく年代的な位置づけは不明であるが、今回の調査結果や古墳時代社会における古墳の展開からすれば古墳時代中期に位置づけられる可能性が高いと考える。

すなわち、牧ノ原古墳群周辺では前方後円墳を中心とする古墳・大型地下式横穴墓・石棺墓・木棺墓・小型地下式横穴墓群といった異なる階層や系譜をもつ多様な墳墓が同時期同地域に存在する。今回の調査ではとくに目立った墳丘をもたない小規模の墓制の実態を明確にし、一地域内で古墳時代中期における九州南部の多様な墓制の様相を構造的に明らかにした点で大きな成果となった。

とくに、牧ノ原古墳群では、前方後円墳をはじめとする古墳・木棺墓・石棺墓・地下式横穴墓・土塙墓と他に類をみないほど多種多様な墓制が集積されて存在する背景には、都城盆地の入り口にあり西諸県の内陸部と宮崎平野部を結ぶ地域間交流の結節点としての位置と都城盆地の生産力が大きかかわっていると考えられよう。

【参考文献】

- 池添俊一1993「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第1号 島根県古代文化センター
川村晋蔵1999「古墳時代の堅縄」、『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
清家 章1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会
高田賀太1998「古墳副葬鉄鉗の性格」『考古学研究』45-1 考古学研究会
北郷泰道1994「武装した女性たち—古墳時代の軍事編成についての観察—」『考古学研究』40-4 考古学研究会

付編2 牧ノ原遺跡群出土の古墳時代人骨

鹿児島女子短期大学 竹中正巳

(1)はじめに

宮崎県高城町牧ノ原遺跡群は高塚墳、箱式石棺、地下式横穴墓などの多様な墓制が混在し、注目を浴びる遺跡である。この高城町牧ノ原遺跡群の平成15、16年度の2年間の発掘調査で、箱式石棺と地下式横穴墓から古墳時代人骨が出土した。このうち3体について、人類学的観察と計測を行った結果を報告する。

(2)出土人骨の所見

平成15年度調査1号箱式石棺墓出土人骨

埋葬姿勢は仰臥伸展葬である。保存状態は良くない。頭頸部に赤色顔料が付着している。人骨の配列に乱れはない。性別は頭蓋の右の乳様突起が小さいことから女性と判定した。歯の咬耗状態はMartinの1~2度である。年齢は歯の咬耗から壮年と推定した。

頭蓋を計測した結果は表1に、頭蓋形態小変異を観察した結果は表2に示す。歯式を以下に示す。

X	7	6	5	4	3	●	1		1	2	3	4	5	6	7	O
8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	○	5	6	7	X

○：歯槽開存 X：不明

●：歯槽閉鎖

咬合は鉛子状咬合である。上顎右側切歯は存在しない。しかし、上顎の歯列は乱れなく並んでおり、上顎右側切歯の隣接歯に捻挫は認められない。上顎右側切歯は風習的抜歯による歯槽閉鎖ではなく、上顎右側切歯は先天的に欠如していたと考えられる。右大腿骨には柱状形成が発達している。

平成15年度調査12号地下式横穴墓出土人骨

歯が1本。それも歯冠部のエナメル質のみが遺存している。赤色顔料の付着は認められない。遺存している歯冠は上顎右第1大臼歯から上顎右第2大臼歯の歯冠で、咬耗は認められない。したがって、未萌出か、萌出していても、対応する下顎歯と咬み合っていないことになり、年齢は5歳から12歳くらいの小児と推定される。性別は不明である。

平成16年度調査1号箱式石棺墓出土人骨(写真1・2)

埋葬姿勢は仰臥伸展葬である。保存状態はよくない。顔面以下全身に赤色顔料が付着している。人骨の配列に乱れはない。性別は頭蓋の左の乳様突起が小さいこと、全身の骨が華奢で小さいことから女性と判定した。年齢は頭蓋の内板と外板に癒合が見られることから、熟年と推定した。

頭蓋を計測した結果は表1に、頭蓋形態小変異を観察した結果は表2に示す。顔面は低く、鼻骨平坦示数は22.7と小さく平坦である。歯式を以下に示す。遺存している4本にはう歯が認められ、C₄である。

XXXXXX×××1		1	0	0	4	5	●	●
------------	--	---	---	---	---	---	---	---

○：歯槽開存 ●：歯槽閉鎖 X：不明

頭部には、前頭骨から後頭骨にかけて、大きな堅髪が付着している。櫛着装人骨は南九州の地下式横穴墓からは出土しているが、南九州で箱式石棺に埋葬された人骨としては初めての出土例である。本例は南九州の高塚墳をはじめ日本列島の各地の高塚墳から出土する女性人物埴輪の櫛着装状態と同様の、額の髪の生え際から、結った髪の根元の方向に、差し込まれた状態の櫛がそのまま遺存したものであり、古墳時代の南九州の女性の髪型を考えていく上で貴重な資料である。日本各地の高塚墳から出土する櫛を着装した人物埴輪の髪型から、高塚墳を営んだ地域の古墳時代の女性に、後世の島田髪に類似する髪型があったことが知られている。古墳時代の女性のこの髪型は、髪を後頭部でひとつに束ねて毛先を内側に折り返し、髪の中ほどを紐で縛って固定していたと考えられている。本櫛着装人骨の出土により、南九州の地下式横穴や箱式石棺に埋葬された女性も、埋葬時には日本各地の高塚墳を営んだ地域の人々と同様の髪型で堅髪を着けて埋葬されていたことが更に確認されたことになる。南九州の女性古墳時代人の日常的な髪型が、高塚墳を営んだ地域の古墳時代の女性と同様、後世の島田髪に類似する髪型であった可能性が十分に考えられる。

表1 頭蓋の主要計測値(mm)及び示数

M No.	人骨番号	1号箱式石棺墓(平成15年度)	1号箱式石棺墓(平成16年度)
		出土人骨	出土人骨
	性別	女性	女性
	年齢	壮年	熟年
1	頭蓋最大長	189	
17	ナリカナルヘ高	131	
3	アーヴィング長	178	
7	大歯根孔長	33	
25	正中矢状根孔長	393	
26	正中矢状前頭孔長	130	
27	正中矢状頸頭孔長	135	
28	正中矢状後頭孔長	128	
29	正中矢状前頭孔長	112	
30	正中矢状頸頭孔長	118	
31	正中矢状後頭孔長	102	
17/1	頭蓋高示数	71.6	
26/25	前頭矢状張示数	33.1	
27/25	頭頂矢状張示数	34.4	
28/25	後頭矢状張示数	32.7	
27/26	矢状面頭面圓示数	103.8	
28/26	矢状面頭面圓示数	98.5	
28/27	矢状面頭面圓示数	94.8	
29/26	矢状面頭面圓示数	86.2	
30/27	矢状面頭面圓示数	87.4	
31/28	矢状面頭面圓示数	79.7	
49	顎長	195	
45	顎片・弓幅	(132.9)	
46	中顎幅	(116.0)	
48	上顎高	59	
51	眉間高(左)	38	
52	眉間高(右)	35	
54	鼻幅	23	
55	鼻高	42	
50	前頭高開幅	21	
F.	鼻齶距離	23	
57	鼻骨最小軸	6	
48/45	Kollmann上顎示数	644.70	
48/46	Vitzthum上顎示数	659.00	
52/51	眉間(示数)	92.1	
54/55	鼻示数	57.1	
50/F.	鼻齶弯曲示数	91.3	
69	脊柱有高	32	
69/1	下腰椎高(右)	33	
69/30	下腰椎高(左)	15	
71	下腰椎側(右)	36	
71a	最小下腰椎側(左)	36	
	前頭骨笠	6.1	
	前頭骨半周	1.4	
	前頭骨半周示数	22.7	



写真1. 平成16年度調査1号箱式石棺墓出土人骨 出土時の頭蓋 (前頭部から後頭部にかけて)

表2 頭蓋形態小変異出現の有無

人骨番号	1号箱式石棺墓(平成15年度)		1号箱式石棺墓(平成16年度)	
	出土人骨	出土人骨	右	左
	性別	女性	女性	
	年齢	壮年	熟年	
	ラムサル小骨	-	-	-
	アステリオン小骨	-	-	-
	頭蓋切痕	-	-	-
	前頭融合吸収	-	-	-
	頭蓋上神經溝	-	-	-
	眼窩上孔	-	-	-
	前額孔	-	-	-
	二分顎骨	-	-	-
	楓突骨結合痕跡	-	-	-
	口蓋隆起	-	-	-
	内側口蓋管骨橋	-	-	-
	外側口蓋管骨橋	-	-	-
	鼻樁口蓋管	-	-	-
	難音欠刻	-	-	+
	後頭部液結節	-	-	-
	第3後頭孔	-	-	-
	後頭部勞突起	-	-	-
	舌下神經管二分	-	-	-
	頸靜脈孔二分	-	-	-
	外耳道骨瘤	+	-	-
	フシヨケ孔	-	-	-
	バカリウス孔	-	-	+
	卵円孔形成不全	-	-	-
	棘孔開裂	-	-	+
	翼棘孔	-	-	-
	床突尖起前骨橋	-	-	-
	左側膜神經優位	-	-	-
	下頬隆起	+	+	-
	豎舌骨管神經管	-	-	-

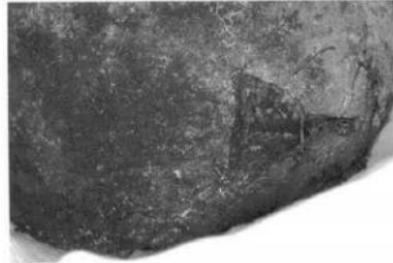
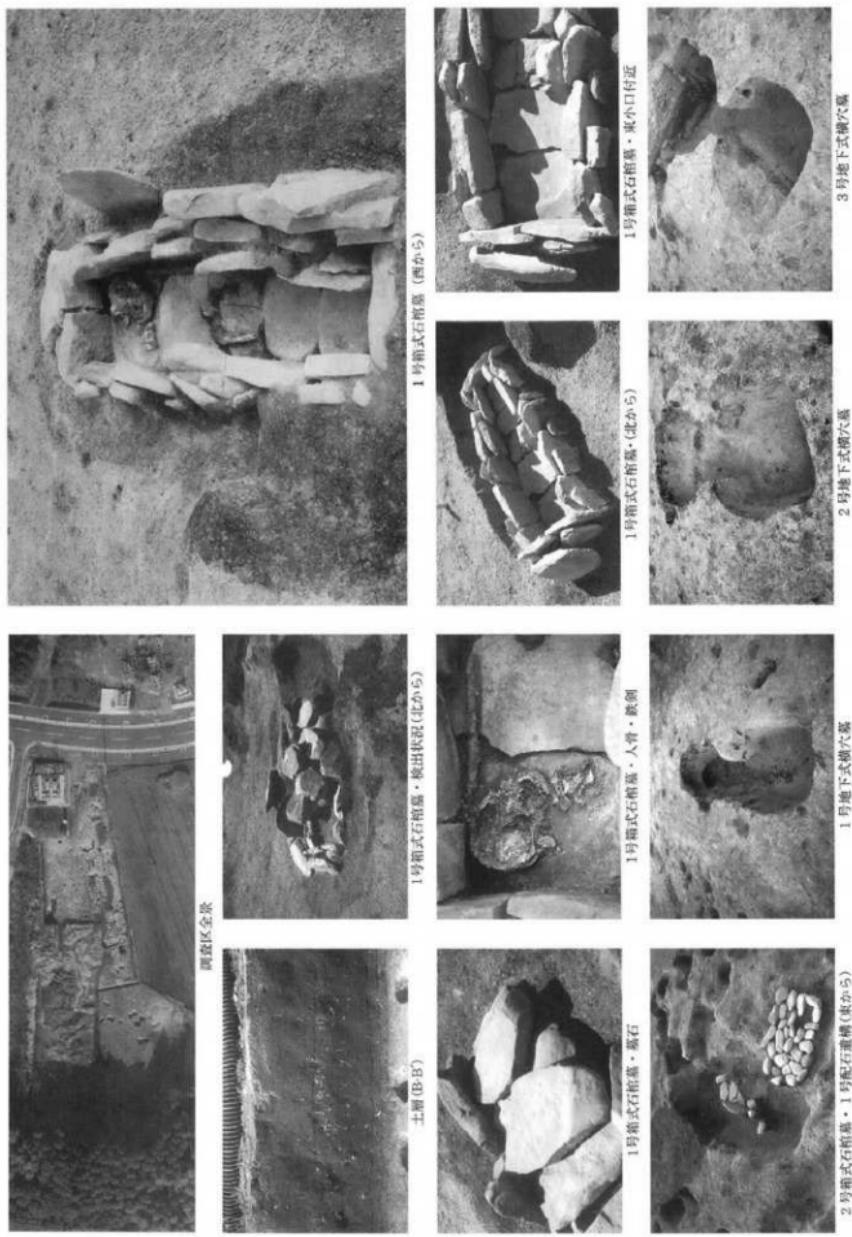
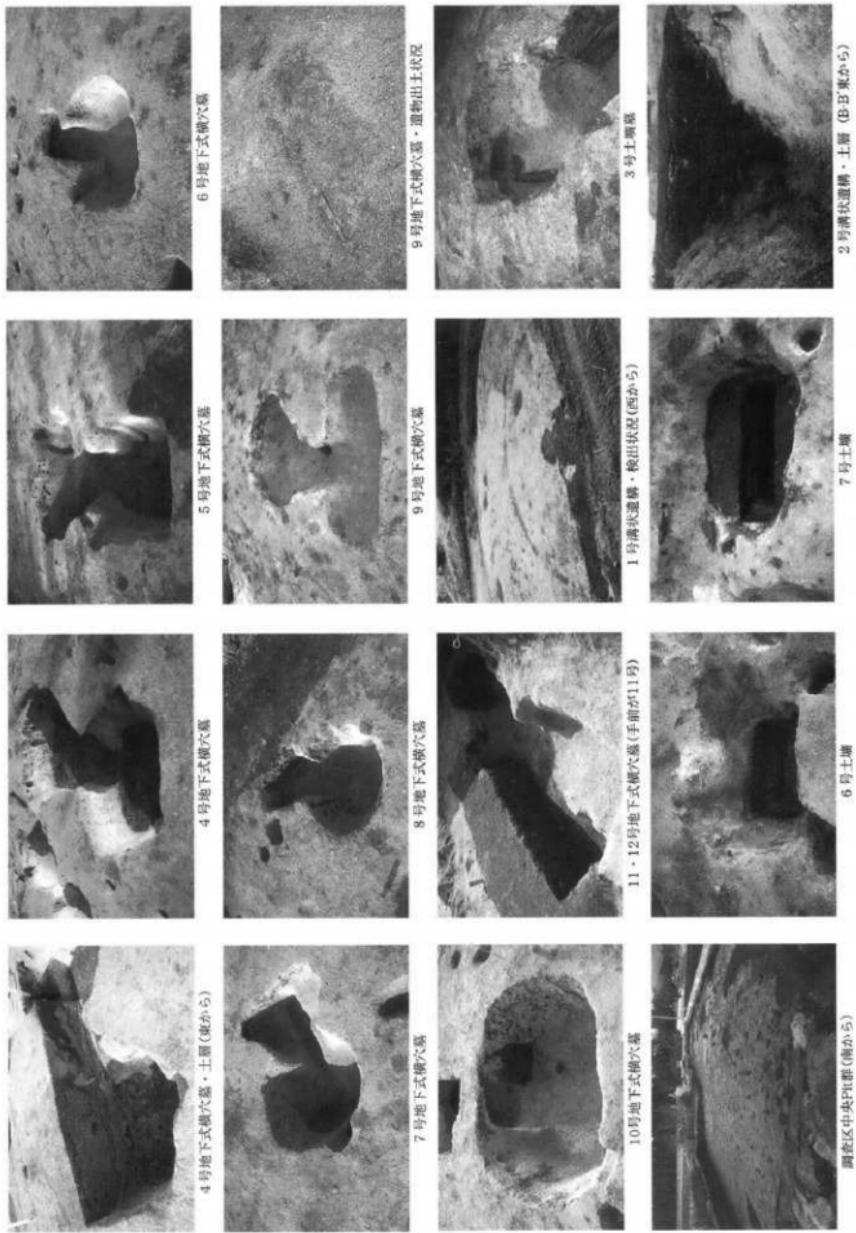


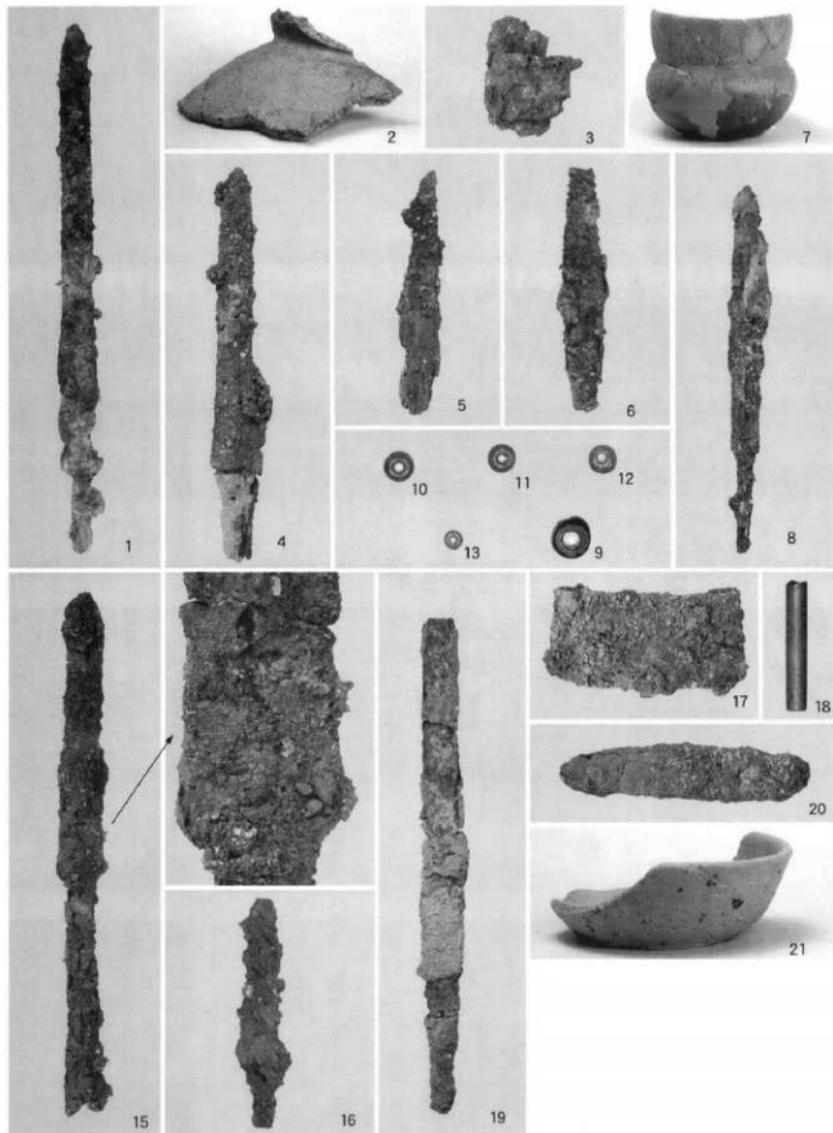
写真2. 平成16年度調査1号箱式石棺墓出土人骨 着装状態の堅樋



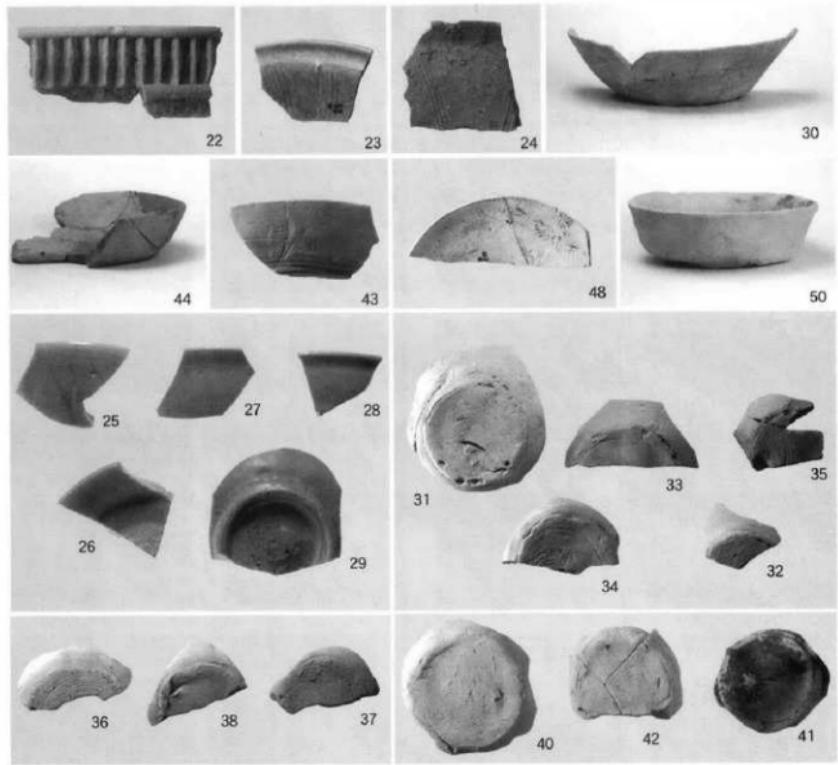
図版1 平成15年度（2003）調査・遺構①



図版2 平成15年度（2003）調査・遺構②



図版3 平成15年度（2003）調査・遺物①

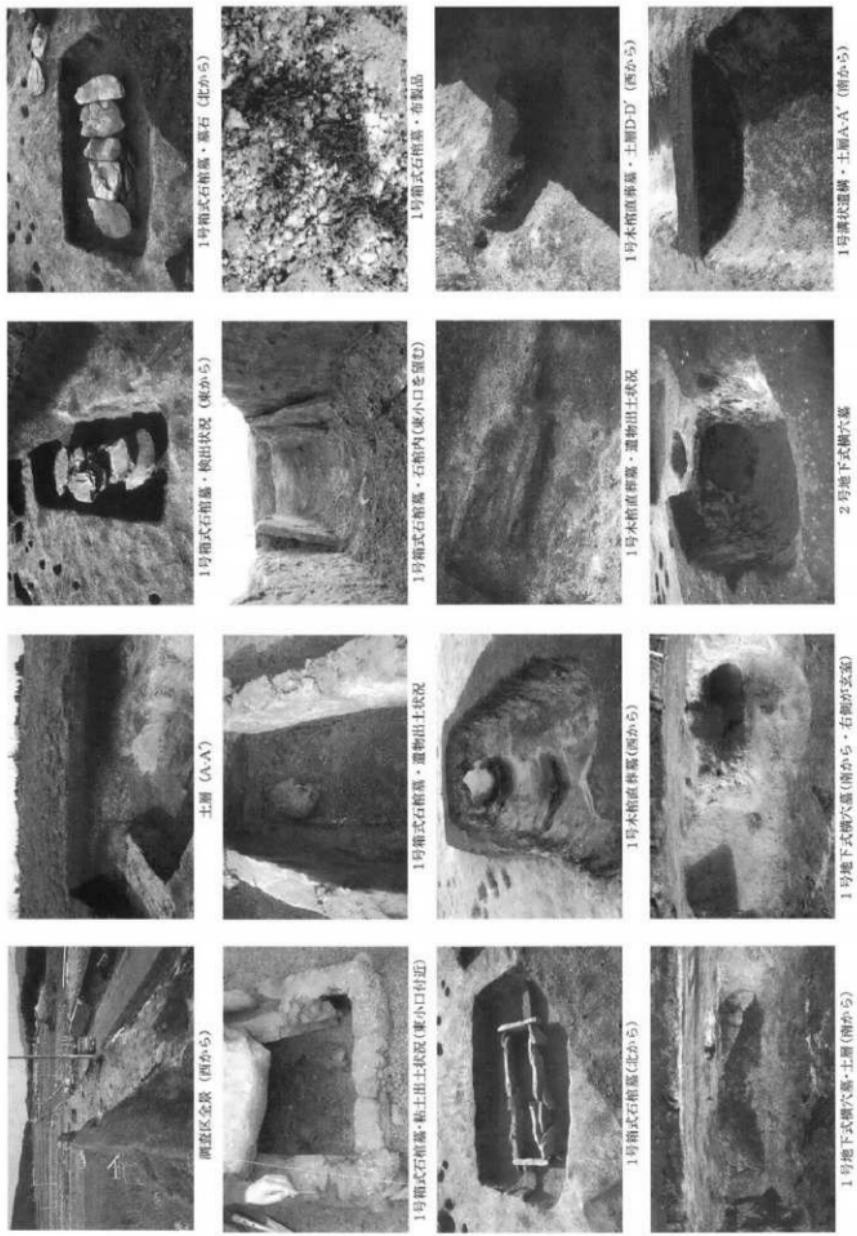


図版4 平成15年度（2003）調査・遺物②

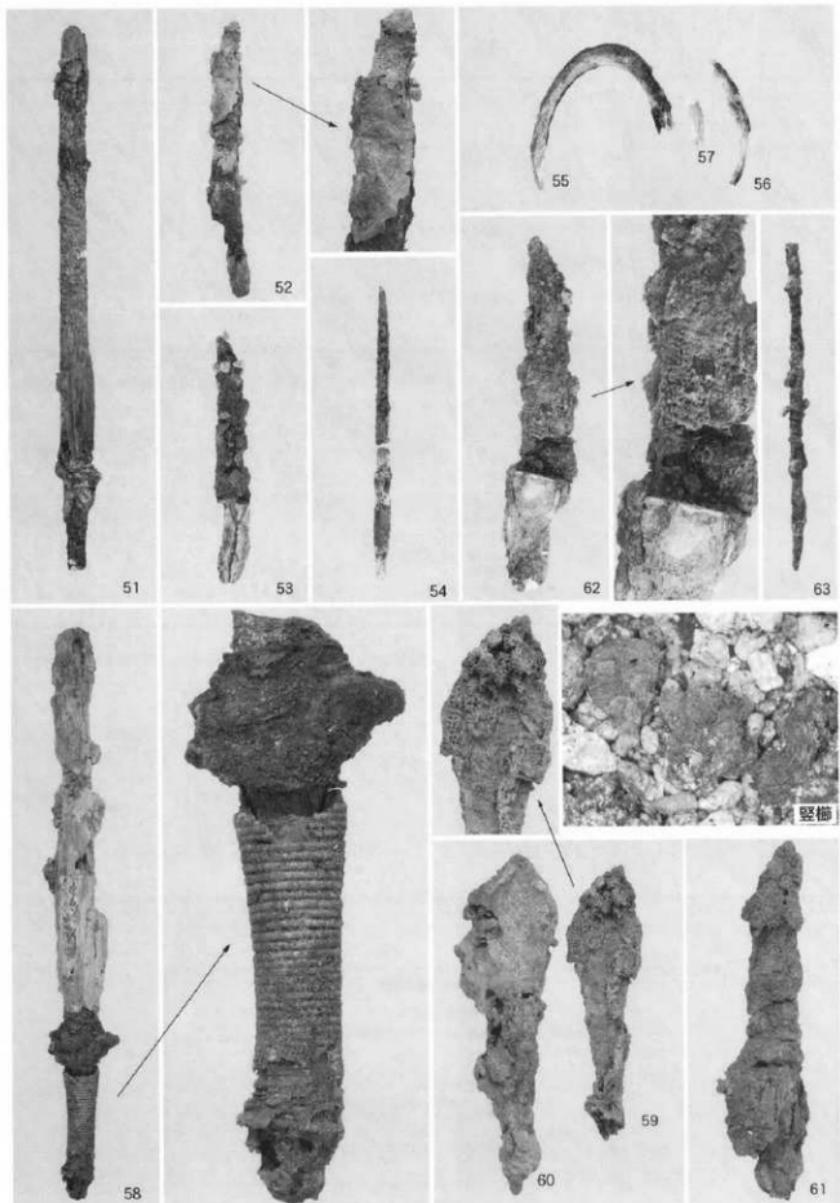


1号木棺直葬墓（西から）

図版5 平成16年度（2004）調査・遺構①



図版6 平成16年度（2004）調査・遺構②



図版7 平成16年度（2004）調査・遺物

報告書抄録

ふりがな	まきのはるいせきぐん							
書名	牧ノ原遺跡群							
シリーズ名	高城町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	近沢恒典・竹中正巳・橋本達也・藤井大祐							
発行機関	高城町教育委員会							
所在地	宮崎県北諸県郡高城町大字穂満坊46番地2							
発行年月日	2005年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号							
牧ノ原遺跡群 平成15年度調査	高城町大字大井手 字牧ノ原・立喰	453439	2017	31° 47' 55" 付近	131° 08' 36" 付近	2003.10.1～ 2003.12.31	2,800m ²	個人農地 造成
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
散布地	绳文時代～ 平安時代	古墳時代：第式石棺墓2・地下式横穴墓12 土壙3・溝状造構1 中世：掘立柱建物跡15・配石遺構1 土壙4・溝状遺構1			古墳時代：铁劍・铁鉢・刀子・小玉・管瓦 中世：青磁・土師器			
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号							
牧ノ原遺跡群 平成16年度調査	高城町大字大井手 字牧ノ原・立喰	453439	2017	31° 47' 55" 付近	131° 08' 36" 付近	2004.12.15～ 2004.12.27	680m ²	道路整備
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
散布地	绳文時代～ 平安時代	古墳時代：第式石棺墓1・木棺直葬墓1 地下式横穴墓3 時期不明：溝状造構1			古墳時代：铁劍・ノミ状工具・刀子 铁鏟・針・貝鏡・堅櫛			

高城町文化財調査報告書第20集

牧ノ原遺跡群

個人農地造成・道路整備に伴う埋蔵文化財調査

2005年3月31日 発行

編集・発行

高城町教育委員会

宮崎県北諸県郡高城町大字穂満坊46番地2

郵便番号885-1202 電話番号0986-58-2317

印刷・製本

(有)アマガミ印刷

宮崎県北諸県郡高城町大字穂満坊114番地4

郵便番号885-1202 電話番号0986-58-5851